内
百十六
本局
414
A2676
法制局第百七十七號 九年
大正十一年四月 大隈侯爵家寄贈

明治十年二月廿日　法制局

大臣
参議
卿
輔

別紙内務省伺會社條例施設ノ儀評議候
處商工ノ業進歩スルニ随テ結社營業者ノ増加スル
ヤ必セリ之ニ因テ一般會社法ヲ制定シテ凡ソ會社タル
者ノ權利義務ヲ明ニシ其體裁ヲ定ムルヿノ必用
ナル勿論ニシテ今内務省ニ於テ會社條例起草ノ擧
アル所以ナリ然ルニ此起草ノ條例ハ社員ノ姓名ヲ以
テ社號ト爲サシメザル所ノ無名會社ノミニ關シ合名
會社差金會社等ノ一般ノ會社ノ條例ニハアラズシテ會

3636

社條例中ノ一部ナリ抑〻結社ノ權利タルヤ人民ノタメ至貴至重ノモノニシテ政府之カ條例ヲ設ケ其權利ヲ制限シ結社ノ自由權ヲ檢束セントスルニハ尤モ慎重ヲ加ヘサルヘカラス蓋シ法理上ヨリ論スル時ハ凡ソ會社タルモノハ性質種類共權利義務等一般ノ通則ヲ定メ之ヲ創立セントスルニ當テ預メ政府ノ允許ヲ要セス人民相互ノ契約ヲ以テ自由ニ創立シ得ヘキモノト預メ政府ノ允許ヲ得テ創立セシムヘキモノトノ別ヲ立テ其一般ノ利益保護ノ為メ止ヲ得サルモノヽ外ハ成ルヘク丈ケ法令ヲ以テ之ヲ管束セサルヲ要ス之ヲ要スルニ一般ノ會社條例ヲ制定スル事緊要ニシテ無名會社ノ條例ノミヲ分テ頒布スルハ不可ナリ内務省呈議ノ條例ハ多ク英國ノ法ニ據リ起草セシモノニシテ頗ル精

密ヲ極メ却テ法按ノ體裁ヲ失ニ一箇ノ著述書ノ躰裁ヲ為セリ大政府法ヲ制定セントスルニハ其大綱領ヲ示スニ止リ其細規則等ハ其管轄主任官廳ニ委任シテ便宜ニ應シ更正ヲ容易ナラシムルヲ要ス之ニ因テ試ニ内務省呈議ノ草按ニ脩正ヲ加ヘ簡明ノ法按ト為サントスルニ其條款ノ數多ナル其實際ニ関スル所ノ大ナル二三ノ識能ヲ以テ良ク之ヲ為シ得ヘキニアラス宜シク法學ニ通スル者ト實際ニ明カナル者トノ若干ノ委員ヲ特選シテ專理委員トシ博ク獨佛蘭等ノ法ヲ按シ大修正ヲ加ヘサルヘカラス竟ニ以テ左ノ通御指令相成可然哉仰高裁

候也

御指令案

伺ノ趣ハ追テ何分ノ沙汰ニ可及事

法

法制局百七十七號
七月廿五日
法制局受付印

天卯七百〇五号

明治八年五月廿七日附ヲ以御下問相成候内
務省伺會社條例ノ儀ニ付意見ノ廉々
同省ヘ協議及ヒ候始末別紙ノ通ニ之レアリ
就テハ此上宜シク御取捨相成候様致度
仍テ別紙協議書寫相添此段上答仕候也
明治九年七月廿四日　司法卿大木喬任
三條太政大臣殿

去ル四月廿八日付ヲ以テ先般御伺議及ヒ置候會社條例寫一ト先ツ御返却有之候樣御掛合及ヒ候末本月八日御還付有之致領承候右ハ最前申進候通ニテ定テ正院ノ御都合ニヨリ更ニ法制局ニ於テ取調相成リ最早當省ニ於テハ關係無之儀ト存シ前段ノ御掛合ニモ及ヒタル譯ニ有之然ルニ本月二日史官ヨリ御下問上答ノ督促有之候ニ付法制局ヨリノ掛合ニヨリ還付ノ次第及回答置候處右ハ全ク法制局ノ都合ニテ借覧之レアリ候由ニテ本月八日同局ヨリ本書差戻シ来リ候就テハ尚又最前之通及御照會決間至急御意見御申越有之度仍テ別紙會社條例

寫相添此段申進候也
明治九年五月廿三日
司法大少丞
内務大少丞
御中

會社條例附箋寫
第一附箋　凡例第三項
何故ニ社員ノ姓名ヲ以テ社号ト為ス可カラザルヤ
責任無限合社ニハ合名ノ姓名ヲ用ユルモ妨ケナカルヘシ　第五節見合
第二同　第二條第四節
保証ノ金高ノ事
右保証金ノ事不都合ナルヘシ佛國法ニ従ヒ保証ナキヿニ定メタキヿナリ
外々ノ保証ニ抵触ス可シ
第三同　第三條第七節第五
保証ノ金高

司法省

前論ニ明了ナル可シ
第四同　第三條第八節第五
係訟ノ金高
同上
第五同　第三條第十一節
請願又ハ記録トハ何ヤウノ手續ヲ為スヿナ
リヤ「第十六節ノヿナルベケレ𪜈」
右ハ詳細ニ示スヘキヿナルベシ
第二十五節見合ノ字ヲ入ル、欤
第六同　第十條第二十八節
解散ノ期ハ解散ノ後ニ改メハ如何
第七同　第十五條第三十六節
會社ヨリ拂ハザレハ云々

明了ナラズ「會社ヨリ拂フヘシ若シ會社拂ヒ
能ハサル時心ノ意欤　原書ヲ取調ベタキ事
也
第八同　第十五条第三十七節
代理人ノ記名調印セル証書類ハ社印アル証
書類ト同視スルヿ
右ハ原書モ如此ナリヤナナト安心シ難キヿ
ナルベシ
第九同　第十七条第四拾九節
官員ハ會社ノ事務ヲ管理スルト管理セサル
ニ論ナク總テ社員ト為ルヲ得可カラサルヿ
ナル可シ
第十同　第二十五条第七十三節第四

條理適當トシテ更ニ命令ヲ下スニ非サレハ
右ハ更ニ無限ノ責任ヲ担當ス可キノ命令ヲ下スニ非サレハト云フ意欲果シテ然ラハ文字簡ニ過ルニ似タリ

第十一同　第廿七条第八拾五節
他ノ管下ニ属スル片ハ其先キノ地方官ヘモ云々
右先キノ三字ヲ刪リタキヿ也

第十二同　第廿七条第八拾八節
移轉先キノ地方　先キヲ移轉ヲ為スニ改メハ如何
旨ヲ其先キノ地方　先キノヲ刪ラハ如何

第十三同　第三拾九条第百十一節
其旨ノ資産ヲ抵當ト為スヿヲ得此ニ至リテ始メテ抵當ト為スヿ欲他ノ貸主等ニ對シ不都合ナルヘシ」抵當ヲ差押ユルニ改メハ如何

第十四同　第三拾九条第百拾二節
裁判所又ハ地方官ニテ適當トスル片ハ旧社員ヲ負責人ト定ムヘシ
何事ヲ指シテ適當不適當ノ區別ヲ為スヘキヤ

第十五同　第三十九条第百十四節
戸主ノ養育ヲ受クル女子ニシテ會社ノ株主トナルヿ及ヒ戸主タル夫ナル者妻ノ負債ヲ擔當スルノ法ハ吾邦財産ノ所有法ニ違ヘリトス

司法省

第十六同　第四十条第百三拾五節

実用ノ金高ハ余分相當ノ見込高ヲ加フル云々

右ハ割賦金ヲハ何レ出スヘキユヘニ其金額内ナレハ実用高ハ用心ニ余分ヲ出サスノ意カムツカシキヿ也

第十七同　第四拾二条第百六拾六節

命令ニ服セサル時ハ管轄ヲ受クル上等裁判所ニ控訴スルヿヲ得ヘシ

會社条例附録

第十八同　第壱条第三節

保証高ノ定期ヲ立ルヿノ不都合ナルヿハ第四節ニ於テ附紙ヲ為シタル如ク不都合ナルヘシ

會社成規

イ　創立証書々例

第十九同　第五

責任ノヿ不都合ナリ

以下此責任ノヿハ更ニ附紙スルヿヲ畧

ロ　會社定款書例

第廿同　第拾七條

二人以上ニテ一株ヲ持ツモノニ報告スルヿ

一意

筆頭ノ者ニ當テヽ送達シタルトキ総体ヘ送達タル云々一意

右ノ二意混同スルニ似タリ

當省ヨリ正院ヘ上請致置候會社條例御省ヘ御
下問ニ相成候ニ付右條例中御意見之廉々先般
附箋ヲ以御掛合有之然ニ其節法制局ヨリ御省
ヘ懸合之儀ニ付一旦及返却置候所今般尚又最
前之通當省見込至急可申越旨御掛合之趣致承
知候當省見込別冊之通ニ候間右ニテ御承知有
之度此段御回答旁御附箋之原本相添申進候也

明治九年六月十七日　　内務大少丞

司法大少丞　御中

司法省

第一附箋

社員ノ姓名ヲ社号ト為ス可ラサル所以ハ抑モ官許ヲ得ル所ノ會社ハ法律ノ眼ヨリ之ヲ視テ一個ノ公人ト為シ即チ會社ノ名稱ヲ以テ原告ト為リ被告ト為リ財産ヲ授受処分スル等ノ權義ヲ得ヘキニ依リ若シ社員ノ姓名ヲ以テ會社ノ稱号ト為ストキハ法律上ニ於テ會社ノ權義ト一私人ノ權義ト或ハ混雜ヲ生センコトヲ防止センカ為メナリ且又官許ヲ得タル公立會社ニ對シテ私立ノ會社アリ組合パートネルシップト稱ス此私立會社ハ人名ヲ以テ其社号ト為スヲ常例トス譬ヘハ三井組ホノ如キ是ナリ此條例ハ方今取調中然ルヲ以テ社号ニ拠テ

司法省

公ニ私立ノ區別ヲ明了ニスルヲ以テ便利ナリト思考スルニ依ラナリ

第二

英國ニテハ株式有限責任無限ノ三種アリ株式有限ナルモノハ其會社閉鎖スルニ當リ各社員ノ責任ハ株金高ニ止リ唯未納高アルモノハ之ヲ納メシメ皆納ノモノハ一切各自ノ身代ニ係ラサルモノトス元来株式有限ノ方法ハ會社ノ保護及ヒ協力起業ノ民心ヲ誘導スルニ至便ナルニ似タリト雖モ本邦人民ハ未タ有限會社ノ方法ニ慣熟セサルヲ以テ即今俄ニ右方法ヲ用フル時ハ不良ノ社伴其詐術ヲ逞ウスルノ資ト為ラサルヲ保シ難シ故ニ此條例實驗ノ後他日其方法ヲ設クルモ晩カラサル可シ因テ此條例ニハ唯保証有限ト責任無限トノ二種ヲ収用シ株式有限ノ一種ハ之ヲ删除セリ

第三

前論ニ明了ナ[illegible]

第四

仝上

第五

特別集議ノ條中ニ其事柄ヲ細挙シタレハ其事柄ヲ右條中ニ於テ見分ケル時ハ記録ト請願トノ手續ヲ知ルヿ難キニ非サル可シ今一例ヲ挙ケシニ假令ハ創立証書ノ條數ヲ変更

司法省

スル中ニテ本店ヲ移轉セント欲シ特別集議ニ於テ之ヲ決定スル時ハ第二十九條ノ手続ニ從ヒ請願ノ上移店免状ヲ受サルヲ知ル可シ又資本高及ヒ株金高ホヲ増加セント欲シ特別集議ニ於テ之ヲ決定スル時ハ第二十一條手続ニ從ヒ記錄ヲ受ケサルヲ得サルヲ知ル可シ其余モ之ニ準ス然ラハ則請願ニ記錄トノ手續ヲ別段詳細ニ示スニ及ハサランカ

第六

解散ノ後ナラハ其會社ノ承諾ヲ受ケルニ及ハサル可シ解散ノ期ニ至ルト雖モ未タ全ク解散セサル場合ナルヲ以テ其會社ノ承諾ヲ要スルナリ故ニ原文ノ儘ニテ可ナラン歟

第七

約定ノ金高ヲ其持主ヨリ請求スル時會社ニ於テ之ヲ拂フ可キノ筋アルハ之レヲ拂ハサルヿヲ得ス又拂フ可カラサル筋ナレハ頭取又ハ発行シタル本人ニテ辨償ス可シト云ヘル意味ナリ(拂ヒ能ハサレハ)ト云フ時ハ會社欠乏又ハ衰凋等ニテ拂フ可キノ力ナキカ如ク思ハル可シ故ニ原文ノ侭ニテ可ナラン歟

第八

都テ委任状ヲ渡シ代理ヲ命スル上ハ差支ナカル可シ原書モ同意ナリ

第九

會社ノ事務ヲ管理セサル官員ハ明治八年第

六十五号及ヒ同年第八十七号ノ御達ニ照シ
社員ト為ルヿアル可シ

第十

條理適當トシテ更ニノ以下ノ文ヲ「無限ノ責任ヲ負担ス可キ旨ヲ命スルニ非サレハ」ニ作ラハ意味明カナラン歟

第十一

附箋ノ通

第十二

仝上

第十三

其會社ニ對シテノ下ニ「抵當ヲ出シ」ノ五字ヲ加ヘ其者ノ資産云々ヲ「其者ノ資産ヲ差押ユル

司法省

ヿヲ得可シ」ニ作ラハ不都合ナカル可シ

第十四

裁判所又ハ地方官ニ於テ賣渡譲渡ノ所為責任ヲ免ルヽ為メニテ正當ナラサル趣旨ト認メ負責人ト為シテ適當トスル時ハ其社員ヲ負責人ト定ムルヲ云フナリ

第十五

附箋ノ通若女子云々以下ヲ刪去シ其以上ヲ存ス可シ

第十六

此条ハ喩ヘハ四人ノ社員ヨリ百円ノ割賦金ヲ収集セント欲スル時ハ一人ニ付二十五円ヲ差出サシメテ可ナリ然ルニ其内ノ一人出

司法省

金スル能ハサルノ様子アレハ一人ニ付三十三円三拾三銭三厘三毛ヲ差出ス可キ旨ヲ通達スルナリ然ル時ハ假令ヒ其内ノ一人出金遅滞スルトモ割賦金ノ総高ハ百円ニ為リ先ツ社外ノ者ヲ満足セシメ不都合ヲ生スル無キノ理ナリ固ヨリ余分ノ見込高ヲ出セト命スルニ非ス若シ三人ニテ出シ合フヿアルモ法律ニ於テ之ヲ咎メスト云フヿナリ本文ノ末ヲ咀嚼ス可シ

第十七
附箋ノ通

第十八
第二附箋ノ説ニテ明カナル可シ

第十九
仝上

第二十
「然ル上ハ其一株ヲ共有セル株主総体ハ送達シタルモノト視做ス可シ」ニ作ラハ如何故ニ二意ニアラス一意ナリ

正院御下問會社條例中意見ノ廉々先般附箋ヲ以テ及御協議置候処本月十七日附ニテ箇條書ヲ以テ御回答ノ趣委細致承知候然ハ右箇條中緊要ノ事件ニテ當省意見相違致シ何分難默止條件有之仍テ御回答ノ箇條ヲ抜キ毎條意見ヲ記シ今又別紙ノ通及御協議度此段及御掛合候也

明治九年六月廿三日

司法大少丞

内務大少丞

御中

司法省

第一附箋

社員ノ姓名ヲ以テ社号ト為ス可ラサル所以ハ抑モ官許ヲ得ル所ノ會社ハ法律ノ眼ヨリ之ヲ視テ一個ノ公人ト為シ即チ會社ノ名稱ヲ以テ原告ト為リ被告ト為リ財産ヲ授受処分スル等ノ權義ヲ得ヘキニ依リ若シ社員ノ姓名ヲ以テ會社ノ稱号ト為ストキハ法律上ニ於テ會社ノ權義ト一私人ノ權義ト或ハ混雑ヲ生センヿヲ防止センカ為メナリ且又官許ヲ得タル公立會社ニ對シテ私立ノ會社アリ組合（パルトナルシツプ）ト稱ス此私立會社ハ人名ヲ以テ其社號ト為スヲ常例トス譬ヘハ三井組等ノ如キ是ナリ此条例（今取調中）ハ方然ルヲ以テ社号ニ

據テ公立私立ノ區別ヲ明了ニスルヲ以テ便利ナリト思考スルニ依テナリ

人名ヲ以テ社号ト為スヲ私立社ノ目標トシ人名ヲ以テ社号ト為サヽルヲ公立社ノ目標ト為ス規則ト為ストキハ私立ノ無名社即チ株式ヲ以テ成リ立ツ所ノ私立社モ人名ヲ以テ社名ト為スヘキヤ恐クハ此ノ如キ規則アルヘキ理ナカルヘシ

第二

英國ニ於テハ株式有限保証有限責任無限ノ三種アリ株式有限ナルモノハ其會社閉鎖スルニ當リ各社員ノ責任ハ株金高ニ止リ唯未納高アルモノハ之ヲ納メシメ皆納ノモノハ一切各自ノ身代ニ係ラサルモノトス元来株式有限ノ方法ハ會社ノ保護及ヒ協力起業ノ民心ヲ誘導スルニ至便ナルニ似タリト雖モ本邦人民ハ未タ有限會社ノ方法ニ慣熟セサルヲ以テ即今俄ニ右方法ヲ用フル時ハ不良ノ社佯其詐術ヲ逞ウスルノ資ト為ラサルヲ保シ難シ故ニ此條例実験ノ後他日其方法ヲ設クルモ晩カラサル可シ因テ此條例ニハ唯保証有限ト責任無限トノ二種ヲ採用シ株式有限ノ一種ハ之ヲ刪除セり

方法ニ慣熟セサルハ保証有限ヲ以テ尤甚シトス株式有限ハ既ニ方今官許ヲ経テ施行シタル者アリ未タ其弊害アリシヲ聞ス且ツ保

証金ノ儀ハ實際裁判上ノ規則ニ抵觸スルヿ
故既ニ銀行條例中ニ於テモ大藏省ヘ協議ヲ
遂ケ保証金ノヿハ廢止ニ決シタルニ因リ此
ノ條例中ニ於テモ保証金ノヿハ廢止シタキ
ヿナリ別紙大藏省ヘ協議ノ冩御參照アリタ
シ且ツ保証金ノヿヲ設ケ置クニ付會社分散
ノ際不合都ハ第十三條ニ於テ之レヲ述ブ

第七

約定ノ金高ヲ其持主ヨリ請求スル時會社ニ
於テ之ヲ拂フ可キノ筋アレハ之レヲ拂ハサ
ルヲ得ス又拂フ可カラサル筋ナレハ頭取又
ハ発行シタル本人ニ辨償ス可シト云ヘル意
味ナリ（拂ヒ能ハサレハ）ト云フ時ハ會社欽乏

又ハ衰凋等ニテ拂フ可キノ力ナキカ如ク思
ハル可シ故ニ原文ノ儘ニテ可ナラン歟

會社ヨリ社外人ニ對シ會社ノ擔當トナルヘ
キヿナレハ會社ヨリ拂ハサルヲ得ス右ノ拂
ヒタル契約書ホニ不規則ノヿヲ為シタレハ
コソ罰金ヲ本人ヨリ取立ツルヿヲ得ルナル
ヘシ若シ會社ノ擔當ニ成ラズ會社ヨリ拂ハ
サルヿナレハ會社外ノヿナリトス會社外ノ
ヿナレハ會社ニ関係ナキ取扱ヲ為シタル本
人ヨリ會社ニ罰金ヲ出スノ理由ナキニ似タ
リ原文見合タキヿ

第十三

其會社ニ對シテノ下ニ「抵當ヲ出シ」ノ五字ヲ

加ヘ其者ノ資産云々ヲ「其者ノ資産ヲ差押ユルヿヲ得可シ」ニ作ラハ不都合ナカル可シ

抵當ヲ出サヾル者カ俄ニ抵當ヲ出シタル者ノ看做シヲ受ク可キ條理ナシトス如何トナレハ左ノ如シ

會社閉店セサル時

譬ヘハ

割賦金ヲ納ムヘキ社員（負債主）—甲

乙　會社　割賦金ノ債主ナリトス

丙　内務省　拂物代金ノ債主又ハ還納ノ償ヲ取ルヘキ債主ナリトス

右ノ場合ニ於テハ乙モ丙モ甲ニ對シテハ債主ニシテ甲ハ負債主ナリトス但シ抵當ナシ

會社閉店ノ時ニ至リ

右ノ場合ニ於テハ乙ナル會社ハ俄ニ抵當ヲ取リ置キタルヿニ成リ丙ナル内務省ハ無抵當ユヘニ丙ハ大ニ驚クヘシ是ヲ不公平ナル法律ト云ヒ表面ト裏面ト矛盾スルノ法律トス

會社條例中御省御意見之廉々先般附箋ヲ以御申越夫々及御答置候処尚緊要之條々御意見之次第再應御申越致承知候当省見込別紙之通ニ候間右ニテ御承知有之度此段及御回答候也

明治九年七月五日　　内務大少丞

司法大少丞

御中

第一

條例ニ基キ登録シタル會社ヲ公立トス即チ其社名ヲ以テ法律上於テ一人ト為ル私立會社即チ組合(固ヨリ株式ヲ以テ成リ立ツモ)ハ否ラス社名ヲ以テ一人ト為ルヘカラス必ス其組合ノ人名ヲ以テ原被ト為リ財産授受ノ權義ヲ有スヘシ決シテ其規例ナキニアラサルナリ然レトモ我カ法律ニ於テ名稱ヲ以テ公立私立ノ區別ヲ立ルヲ要セサルトノ御見込ナラハ之ヲ刪除スルモ妨ケ无シ

第二

保証有限ノ制ハ現時我カ法律上ニ抵觸スルナラハ御見込之通異存ナシ

第七
御協議ノ趣意ニ基キ改正スヘシ

第十三
仝上

明治八年五月　内務課長

別紙内務省伺會社條例施設ノ件司法省ノ意見
御下問相成度候也

司法省ヘ御下問按

別紙内務省伺會社條例施設ノ儀及下問候条
意見早ニ可申出事

別紙内務省伺會社條例施設

之儀下問候条意見早々可申出

候也

明治八年五月廿七日

太政大臣三條實美

司法卿大木喬任殿

會社條例施設之儀ニ付伺

諸會社之儀従前大藏省掌管以来人民結社出願之時々其業体并社則等調査之上概子其契約上不相當之儀モ無之又他之障碍ニモ不相成見込之分ハ其時々之詮議ヲ以テ聞届来候儀之處追々諸社営業出願之徒モ相増候ニ随ヒ中ニハ官許ヲ假リテ以テ募金自救之資ト為シ或ハ會社ノ計算分明ナラスシテ社負徒ラニ損害ヲ蒙ル等種々不都合之趣モ相聞ヘ難捨置筋ニ付右取締之方法ヲ設ケ其弊害ヲ匡救セサル可カラストノ目途ニ由リ昨明治七年四月中上申ノ上爾来各府縣ヨリ會社創立之儀申立候都度會社條例取調中

ニ付追テ何分之儀相達候迄人民之相對ニ任セ
營業為致候樣指令致シ来右上申之節ヨリ引
續英國政府及ヒ其他ノ會社法則ヲ參考シ
本邦實地ノ形況ヲ斟酌シ一定ノ條例為取調
置候處此程成業致シ候ニ付即別冊指出申候
尤モ條例中罰則及ヒ分散等之條款ハ一應司
法省ヘ御下問之上御制可有之度存候依テ別
冊會社條例案并ニ御布告案相添此段相
伺候也

明治八年五月十二日　内務卿大久保利通

太政大臣三條實美殿

御布告案

今度一般ノ會社條例別冊之通製定致シ
候條此旨布告候事

但社長頭取其余重立候者ノ姓名ヲ以稱號ト為ス
所ノ會社及ヒ組合ハ此條例ノ外ト可相心得候事

明治八年五月

太政大臣三條實美

會社條例

内四百四十九号属

會社條例

目次

第一條　創立方法ノ大綱ヲ明カニス
第二條　會社ノ體裁責任ノ區別ヲ明カニス
第三條　創立証書ニ掲載ス可キ條件及ヒ之ヲ變更スルノ定則ヲ明カニス
第四條　會社定款ノ主意及ビ其取調方

大正十一年四月 大隈侯爵家寄贈

內務省

ノ叓ヲ明カニス

第五條　創立証書及ビ會社定款記録済ノ効用ヲ明カニス

第六條　發起人ノ責任ヲ明カニス

第七條　創立請願及ビ免許ノ順序ヲ明カニス

第八條　開業免狀ノ効用ヲ明カニス

第九條　創立証書及ヒ會社定款ノ冩本配達ノ叓ヲ明カニス

第十條　會社名稱ノ禁令並ニ改稱ノ叓ヲ明カニス

第十一條　外國人民ノ制限ヲ明カニス

第十二條　金券及ビ通用手形ヲ發行ス可カラザルノ禁令ヲ明カニス

第十三條　本店ニ書記局ヲ設ク可キ叓ヲ明カニス

第十四條　掲標ノ定規ヲ明カニス

第十五條　社印文字ノ定規及ビ社印ノ効用ヲ明カニス

第十六條　印鑑上達ノ叓ヲ明カニス

第十七條　會社役人及ビ附屬者ノ事ヲ明
カニス

第十八條　株式並ニ入金高ヲ授受賣買ス
ルノ定則ヲ明カニス

第十九條　社員録ノ登記方及ビ其効用制
限ヲ明カニス

第二十條　社員表毎年上達ノ事ヲ明カニ
ス

第二十一條　資本高ヲ増加シ及ビ株金高ヲ
變更スルノ定則ヲ明カニス

第二十二條　資本高ヲ減縮スルノ定則ヲ明
カニス

第二十三條　社員納金滞リニ就キ処分ノ定
則ヲ明カニス

第二十四條　社員責任ノ制限ヲ明カニス

第二十五條　有限會社ニ於テ頭取支配人等
ノ責任ヲ無限ニ定メ得ルノ權
利及ビ其制限ヲ明カニス

第二十六條　社員集議ノ諸則ヲ明カニス

第二十七條　分店移店ニ就キ履行ス可キ定

内務省

則ヲ明カニス
第二十八條　會社ノ記錄縱覽ノ事ヲ明カニス
第二十九條　貸入帳簿ノ事ヲ明カニス
第三十條　保險其外受托ノ會社毎年ノ計算ヲ報告ス可キ事ヲ明カニス
第三十一條　檢査請願ノ權及ヒ檢査役ノ事ヲ明カニス
第三十二條　往復書類送達方ノ事ヲ明カニス
第三十三條　社員定員以下ニテ營業ス可キ

內務省

制限ヲ明カニス
第三十四條　社員已納ノ金ヲ引取ル可カラザルノ禁令ヲ明カニス
第三十五條　會社營業中ノ禁令ヲ明カニス
第三十六條　會社ノ決議書ハ公裁上ノ憑証ト為ス可キ事ヲ明カニス
第三十七條　會社損失アル時ハ其後ノ利益配當ヲ差止ム可キ事ヲ明カニス
第三十八條　中裁人ヲ定メ得ルノ權利ヲ明

內務省

カニス
第三十九條　負責人ノ叓ヲ明カニス
第四十條　會社官命ニテ閉鎖スルノ定則ヲ明カニス
第四十一條　會社自ラ閉鎖スルノ定則ヲ明カニス
第四十二條　會社閉鎖ニ付一般ノ定則ヲ明カニス
第四十三條　請願及ビ報告書類ノ上達方並ニ印税ノ叓ヲ明カニス
第四十四條　記録手數料ノ定則ヲ明カニス
第四十五條　罰金ノ処分ヲ明カニス
第四十六條　條例改正ノ叓ヲ明カニス

會社條例附録

目次

第一條　在來官許ノ會社ニ本條例ヲ適用スル叓ヲ明カニス
第二條　在來官許ノ會社ニテ本條例ニ遵ヒ社則ヲ改正スルノ定則ヲ

明カニス

第三條　從前十八以上ニテ官許ヲ得ザル所ノ會社ハ本條例ニ從ヒ社則ヲ改正ス可キ支ヲ明カニス

第四條　在来ノ會社ニ於テ保証有限タランヿヲ請願スルノ手續ヲ明カニス

會社條例

此條例ハ日本帝國中銀行並株式取引所等ノ如キ他ノ主管ノ條例(已定未定ニ拘ハラズ)ヲ遵奉シ又ハ特別ノ免許ヲ得テ創立スベキ各會社ヲ除クノ外工商及ヒ其他各業ノ會社ヲ創立シ之ヲ保續シ或ハ之ヲ閉鎖スル等ニ適用ス可キガ爲メ明治八年　月　日日本帝國政府ニ於テ之ヲ制定スルモノナリ

凡例

一凡ソ會社ハ其目途端正善良ナラザルヲ得ズ

内務省

一故ニ其事賭博ニ類シ或ハ風俗ヲ乱リ或ハ世人ヲ誘惑スル等都テ有害無益ノ職業ト視做ス可キモノハ決シテ開業ノ免許ヲ付與スルコト無カル可シ

一明治八年　月　日ヨリ以後他ノ條例ニ依ラズ又ハ特別ノ免許ヲ得ルニ非ズシテ五人以上合體シ會社ヲ創立セントスルモノハ總テ此條例ヲ遵奉セザル可カラス

此條例ヲ遵奉ス可キ所ノ會社ハ社員ノ姓名ヲ以テ社号ト為ス可カラズ又社員ノ權利ハ

内務省

其所出ノ金高ニ應スルニ非サレハ決シテ差等ヲ立ツ可カラズ

會社ノ發起人五人以下タリトモ社員十名ニ充ツル時ハ此條例ヲ遵奉セザル可カラズ

會社他ノ職業ヲ本體ト為ストイヘトモ旁ラ保險及ビ其餘世人ノ委托ヲ引受ク可キ職業ヲ兼ヌルモノハ總テ之ヲ保險或ハ委托引受ノ會社ト承認ス可シ

一此條例ヲ遵奉シテ免許ヲ受ケタル會社ハ之ヲ官許某會社ト稱ス可シ

内務省

第一條　創立方法ノ大綱ヲ明カニス
第一節　此條例ヲ奉シテ會社ヲ創立セント欲スルモノハ下ニ掲クル第二第三第四第七條ノ旨趣ニ遵ヒ會社ノ體裁責任ノ目途ヲ定メ社員一同ヲ束制ス可キ盟約及ヒ規則ヲ取極メ以テ創立証書會社定款ヲ編製シテ之ヲ地方官ニ差出シ内務卿ノ免許ヲ請フ可シ

第二條　會社ノ體裁責任ノ區別ヲ明カ

寫

ニス

第二節　會社創立ノ初ニ當リ其資本ノ金高ヲ定メ之ヲ株式ニ分割シテ一株ノ金高ヲ取極ムルモノハ之ヲ定額會社ト稱ス可シ又資本ノ金高并株金高ヲ定メズシテ唯入社ノ人員ヲ限リ其各人ノ意ニ任セテ入金セシムルモノハ之ヲ不定額會社ト稱ス可シ

第三節　又會社ノ責任ヲ區別シテ會社ヲ有限無限ノ二種ニ分ツ即左ノ如シ

保証有限會社

責任無限會社

第四節　保証有限會社（以下之ヲ有限會社ト稱ス）ハ定額不定額ニ拘ハラズ其株金高（定額會社ニ係ルハ以下準之）入金高（不定額會社ニ係ルハ以下準之）ノ外會社閉鎖ノ時ニ當リ會社ニ屬スル負債及鎖店ノ費用ヲ辨償ス可キカ為メ兼テ保証ノ金高ヲ約定シ置キ之ヲ社員ノ負担ス可キ責任ノ限トス可シ但保証ノ金高ハ發起人ノ議定ニ任スト雖氏株金高入金高ノ半數以下タルヲ得ズ又保険及ヒ其餘世人ノ委托ヲ受ケ信任ヲ主トシテ営ム可キ業

體ノ會社ハ必ス倍數以上タル可シ

第五節　責任無限會社（以下之ヲ無限會社ト稱ス）ハ定額不定額ニ拘ハラス其社員ハ會社閉鎖ノ時ニ當リ負債及ヒ鎖店ノ費用ヲ併セテ之ヲ負担シ各自ノ身代分散ニ至ルトイヘトモ尚其責任ヲ免レサルモノトス

第三條　創立証書ニ掲載スヘキ條件及ヒ之ヲ變更スルノ定則ヲ明カニス

第六節　創立証書トハ會社ヲ創立スルニ付綱領ノ條件及ヒ社中ノ約束ヲ明記シ総社員ヲシテ必ス之ヲ確守實践セシム可キ旨ヲ政府ヘ對シ保証シテ以テ其開業ヲ請願スルモノナリ但此証券ハ下ノ第七節ヨリ第十節迄ノ旨趣ヲ奉シ成規ノ書例〔図〕標ニ照シテ編製ス可シ

第七節　有限定額會社ハ右創立証書ニ左ノ條件ヲ掲載ス可シ

第一　創立セントスル所ノ會社ノ名稱并ニ其名稱ノ上ニ有限ノ二字

内務省
内務省

第二　會社ノ本店ヲ設立ス可キ所ノ府縣
ノ名及ビ地名番號
第三　會社ヲ創立スル目的
第四　資本ノ見込高及ビ分割シタル株數
并ニ一株ノ金高
第五　各社員ハ株金高ニ應シ別ニ保証ノ
金高ヲ約定シ會社閉鎖ノ事起ル時ハ會
社ニ属スル負債ノ高并ニ鎖店ノ費用ヲ
辨償セシカ為メ會社現存資産ノ外右保
証ノ金高ヲ超エサル迄ハ入金セシム可

内務省

シ若社員退社ノ後一年間ニ會社閉鎖ス
ル時ハ其在社中ニ係リタル會社ノ負債
及ビ鎖店ノ費用ハ之ヲ担任セシムルヿ
現在ノ社員ト同様タル可キ旨
但此証書ノ記名人ハ必ス一株以上ヲ
所持スルヲ要ス而シテ其所有スル株
數ハ之ヲ姓名ノ上ニ掲ク可シ
第八節　有限不定額會社ノ創立証書ニ掲載ス
可キ條件ハ左ノ通タル可シ
第一第二第三前節ト同シ

内務省

第四　入社セシム可キ見込ノ人員
第五　各社員ハ入金ノ高ニ應シ別ニ保証ノ割合ヲ約定シ會社閉鎖ノ事起ル時ハ會社ニ属スル負債ノ高并ニ鎖店ノ費用ヲ辨償セシカ爲メ會社現存資産ノ外右割合ノ金高ヲ超エサル迄ハ入金セシム可シ若社員退社ノ後一年間ニ會社閉鎖スル時ハ其在社中ニ係リタル會社ノ負債及ヒ鎖店ノ費用ハ之ヲ担任セシムルヿ現在ノ社員ト同様タル可キ旨

但此証書ノ記名人ハ其入金高ヲ姓名ノ上ニ掲ク可シ

第九節　無限定額會社ノ創立証書ニハ左ノ係件ヲ掲載ス可シ
第一　創立セントスル所ノ會社ノ名稱
第二　會社ノ本店ヲ設立ス可キ所ノ府縣ノ名及ヒ地名番号
第三　會社ヲ創立スル目的
第四　資本ノ見込高及ヒ分割シタル株數并ニ一株ノ金高

内務省

第五　各社員ハ無限ノ責任ヲ担任ス可シ
若シ社員退社ノ後一年間ニ會社閉鎖ス
ル時ハ其在社中ニ係リタル會社ノ負債
及ビ鎖店ノ費用ハ之ヲ担任セシムルヿ現
在ノ社員ト同様タル可キ旨
但此証書ノ記名人ハ必ス一株以上ヲ
所有スルヲ要ス而シテ其所有スル株
數ハ之ヲ姓名ノ上ニ掲ク可シ

第十節　無限不定額會社ノ創立証書ニ掲載ス
可キ條件ハ左ノ通タル可シ

第一第二第三前節ト同シ
第四　入社セシム可キ見込ノ人員
第五　前節ト同シ
但此証書ノ記名人ハ其入金高ヲ姓名ノ
上ニ掲ク可シ

第十一節　創立証書ニ掲ケタル條件ハ會社ニ
於テ特別集議第七十六第七十七第七十八節ト照ス可シノ方法ニ
據リテ決定シ其事柄ニ應シ請願又ハ記録ノ
手續ヲ經ルニ非サレハ之ヲ變更スルヲ得サル
可シ

内務省

第四條　會社定款ノ主意及ビ其取調方ノ事ヲ明カニス

第十二節　會社定款ハ創立証書ノ記名人ニ於テ便宜トシテ決定シタル會社要領ノ規則ヲ成規ノ書例（回標）ニ倣ヒ編製セシモノヲ云フ

第十三節　右會社定款ハ此條例ノ旨趣ニ戻ラサルニ於テハ成規書例（回標）中ノ箇條ヲ取捨シ或ハ之ヲ増加スル等總テ創立証書ノ記名人ノ決定ニ任カス可シ

内務省

第十四節　此條例ヲ奉シタル會社ハ定額不定額ニ拘ハラズ其株券或ハ入金証券ヲ発行スルノ權利ヲ附與スルモノト雖モ若創立証書ノ記名人等之ヲ世上ニ公賣スルヲ欲セサル時ハ其約定規則ヲ會社定款中ニ掲ケ置ク可シ

第十五節　此條例ヲ奉シタル會社ハ其業務ヲ永世ニ保續スルヲ得ルトイヘトモ若預メ解散ノ期限ヲ定ムルモノハ之ヲ會社定款中ニ掲載ス可シ

内務省

第五條　創立証書及ビ會社定款記録済ノ効用ヲ明カニス

第十六節　此條例ヲ履行シテ内務卿ノ准認ヲ得内務省ノ記録ニ入リシ創立証書及ビ會社定款ハ本國中何レノ地ニ於テモ充分ノ憑証トナリ尓後其會社ニ於テ社員ト約束スル恰モ各社員自ラ之ニ記名調印セシト同様ニテ其社員ハ勿論其相續人後見人等總テ其跡式ヲ引受ケ名ル者ハ右約束ヲ確守ス可キモノト視做ス可シ

第六條　発起人ノ責任ヲ明カニス

第十七節　創立証書ニ記名シタル人々ヲ発起人ト稱ス定額會社ニ於テハ其発起人總員ニテ必資本高四分一以上ノ株数ヲ所有ス可ク又不定額會社ニ於テハ其発起人總員ノ入金高凡ソ見込資本高ノ四分一ニ充タザレバ開業ノ免許ヲ受クルヲ得ス但不定額會社ハ創立請願ノ時ニ當リ開業ノ目論見大略書ヲ差

出シ之ニ充見込資本高ヲ記載シ右四分一ノ割合ヲ証明ス可シ

第十八節 発起人ハ創立ノ事ヲ周旋シテ開業免状ヲ受クルノ日迄之ニ就キ生シタル諸費用ハ一切之ヲ負担スルヲ當然トス

第十九節 若會社創立ノ事行ハレスシテ開業免状ヲ受ケ得ザル時ハ発起人タル者兼テ入社ヲ約セシ人ヨリ預リ置キシ金高アルトキハ之ヲ其儘返辨シテ少許ノ費用モ之ヨリ引去ルヿヲ得サル可シ

内務省

第二十節 発起人ハ免許状ヲ受ケサル以前ノ諸費用ヲ明細ニ簿記シ入社人ノ撿閲ニ供シ其承諾ヲ得タル上ハ之ヲ社員一同ニ配當シ辨償セシム可キ約定ヲ為スヿヲ得可シ

第二十一節 會社開業以前発起人ニテ取引セシ諸約定ハ其後入社セシ社員ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ會社ニテ其責ニ任ス可カラス

第二十二節 凡ソ入社ヲ許ス所ノ人々ニハ創立証書及ヒ會社定款ノ寫其他開業ノ目論見書或ハ費用ノ計算帳等ヲ逐一差示シ其承諾

内務省

ノ証トシテ記名調印セシム可シ若其承諾ノ
証ナクシテ其事ヨリ他日違論ヲ生スルヿア
ラハ其社員ハ株金ヲ其儘引取リ退社スルヿ
ヲ得可ク若其社負ハ損害ヲ蒙ムルヿアラハ之
ヲ発起人ヨリ辨償セシム可シ

第二十三節　開業ノ目論見書ハ會社ノ目的及
ビ其情實ヲ明示スルモノニテ人々之ヲ信據
トシテ入社ヲ約スルヿ當然タレハ若此書中
奸偽アリテ社員損害ヲ蒙ムル時ハ之ヲ発起
人ヨリ辨償セシム可キハ勿論其事柄ニ依リ

内務省

テハ法律ニ照シテ處断ス可シ

第七條　創立請願及免許ノ順序ヲ明カ
ニス

第二十四節　発起人ハ創立証書及ビ會社定款
ノ各通（第百七十一第百七十二節ト照ス可シ）不定額會社ニテハ
目論見大略書トモ毎ニ記名調印シ會社ノ本
店ヲ取立ツ可キ地方ノ區戸長ニ奥書調印ヲ
乞ヒ受ケ之ヲ其地方官廳ヘ差出ス可シ地方
官ハ発起人ノ身元行状ヲ捜索シ其目的ノ利

内務省

害障碍ノ有無ヲ参酌シ之ヲ相當ト思考スレハ意見書ヲ添ヘテ内務卿ニ送進ス可シ

第二十五節 内務卿右會社ノ創立ヲ承認スル時ハ其創立証書及ヒ會社定款ヲ内務省ノ記録ニ載セシメ其記録済ノ印章アル証書定款ノ寫ト共ニ開業免状ヲ其地方官ニ達シ請願人ニ交付セシム可シ

第八條 開業免状ノ効用ヲ明カニス

第二十六節 前條ノ手續ヲ履行シテ開業免状ヲ得タル後此會社ノ社員録ニ記名調印スル人々ハ創立証書及ヒ會社定款ノ約定ヲ奉シ共同一體ト為リテ其業務ヲ営ミ社名ヲ以テ動産不動産ヲ所有スルヿヲ得可ク又此會社ハ其役人ノ姓名ヲ以テ總社員ニ代リ原告又ハ被告ト成リテ公裁ヲ仰クノ權ヲ有スルモノトス

第九條 創立証書及ヒ會社定款ノ寫本配達ノ事ヲ明カニス

内務省

第二十七節　創立証書及ヒ會社定款ハ内務省ノ記録ニ入リ其印章ヲ受ケシ後ハ會社ヨリ其寫本一部宛ヲ各社員ヘ配達シ其後入社スル所ノ人々ニモ同様配達ス可シ若會社ニ於テ記録済ノ証書定款ヲ請取リシ日又ハ入社約定ノ日ヨリ事故ナクシテ三十日間ニ之ヲ配達セサル時ハ其後ノ怠慢時間一日毎ニ五圓以下ノ罰金ヲ取立ツ可シ

第十條　會社名称ノ禁令并ニ改称ノ事

ヲ明カニス

第二十八節　會社ハ諸官省寮司及ヒ在来ノ會社ト同名又ハ之ニ紛ラハシキ類似ノ名称ヲ以テ免許ヲ請フ可カラズ若同名又ハ類似ノ名称アレハ其新立ノ會社ニ命シテ改名セシム可シ但在来ノ會社已ニ解散ノ期ニ至リ其承諾ヲ受ケ得タル確証アルモノハ此限ニ在ラズ

第二十九節　會社ハ特別ノ議定（第七十六第七十七第七十八節ト照ス可シ）ニ依リ其名称ヲ改ムルヿヲ得可シ但

内務省

右決議書ノ寫ハ之ヲ其地方官ニ差出シ内務省ノ記録ヲ請フ可シ若其差出シ方ヲ怠ル時ハ第七十九節ノ罰例ニ従フ可シ

第三十節 右改称ニ就テハ決シテ會社ノ權利ヲ變更スルヿ無カル可シ

第十一條 外國人民ノ制限ヲ明カニス

第三十一節 外國人ハ日本政府ニ對シ會社創立ヲ請願ス可カラス又日本人民ノ會社ニ加入シテ社員ト為ルヲ得ス

第十二條 金券及ヒ通用手形ヲ發行ス可カラザルノ禁令ヲ明カニス

第三十二節 此條例ヲ奉シタル會社ハ株券發行ノ外金券並ニ通用手形ヲ發行スルノ權利ナシトス若シ之ヲ犯ス時ハ法律ニ照シテ處断ス可シ但日本政府ヨリ特典ヲ與フルモノハ此限ニアラス

第十三條 本店ニ書記局ヲ設ク可キ事ヲ明カニス

内務省

第三十三節　會社ハ必ス本店ニ書記局ヲ設ケ置キ此局ニ於テ各官廳及ヒ社負債主等ヘノ諸報告又ハ往復ノ信書ヲ担當管理セシム可シ若此局ヲ設ケズシテ営業スル時ハ其営業ノ初日ヨリ此局ヲ設ケザル時間一日毎ニ五圓以下ノ罰金ヲ取立ツ可シ

第十四條　掲標ノ定規ヲ明カニス

第三十四節　凡テ會社ハ開業ノ日ヨリ其店ノ外面見易キ場所ニ於テ明瞭ノ文字ヲ用ヒ其社名ヲ掲示ス可シ但有限會社ニ於テハ其社名ノ上ニ必ス有限ノ二字ヲ加フ可シ若之ヲ加ヘサル時ハ其加ヘザル時間一日毎ニ五圓以下ノ罰金ヲ取立ツ可シ

第十五條　社印文字ノ定規及ヒ社印ノ効用ヲ明カニス

第三十五節　凡ソ社印ハ明瞭ノ文字ヲ用ヒ地名及ヒ社号ヲ彫刻ス可シ但有限會社ハ其社名ノ上ニ必ス有限ノ二字ヲ加フ可シ

内務省

第三十六節　會社ノ頭取及ビ其他ノ役人ニ於テ若公文報告証券約定書類ニ其社印ヲ捺セザルカ又ハ社則ニ違ヒ他ノ印章ヲ用フルカ或ハ之ニ社名ヲ記セスシテ発行セシ時ハ其事情ニ依リ會社或ハ頭取又ハ取扱ヒシ本人ヨリ五十圓以下ノ罰金ヲ取立ツ可シ且其証券約定ノ金高ヲ其持主ヨリ請求スル時ハ之ヲ會社ヨリ拂ハザレハ頭取又ハ発行シタル本人ヨリ辨償セシム可シ

第三十七節　會社ハ其社印ヲ捺シタル委任状ヲ以テ代理人ヲ命シ國内ハ勿論日本ト條約済ノ各國ニ於テ証券及ヒ約定書類ヲ発行セシムルヲ得可シ但其代理人ノ記名調印セル証書類ハ其社印ヲ捺シタル証書ト一様ニ視做スベシ

第十六條　印鑑上達ノ事ヲ明カニス

第三十八節　此條例ヲ奉シタル會社ハ開業前ニ其社ノ印鑑ヲ地方官ヘ差出シ置キ営業中改制ノ度毎ニ同様之ヲ差出ス可シ但地方官

内務省

ハ之ヲ内務卿ニ送遞ス可シ

第三十九節　市會社ノ印鑑ヲ開業又ハ改刻ノ時ヨリ十日以内ニ地方官ヘ差出サヾル時ハ右期限後ノ怠慢時間一日毎ニ五圓以下ノ罰金ヲ取立ツ可シ

第十七條　會社役人及ヒ附属者ノ事ヲ明カニス

第四十節　凡ソ會社ハ頭取副頭取支配人書記方勘定方帳簿方手代等ノ外取締役撿査役肝煎及ヒ其他ノ名義ヲ以テ其便宜ニ從ヒ相當ノ役人ヲ命スルヲ得可シ而シテ頭取副頭取ハ必社員中ヨリ撰任シ一名又ハ数名ニテモ妨ケナシトス但其頭取副頭取支配人取締役撿査役肝煎等重立タル役人ノ權限及ヒ處務ノ定規ハ之ヲ會社定款中ニ掲載シ其以下役人ノ職制等ハ社中申合規則ニ記載ス可シ

第四十一節　會社ハ營業ノ模様ニ依リ社中或ハ社外ヨリ仲買手代或ハ請負等其他何等ノ名目ニテモ相當ノ約定ヲ以テ之ヲ取極メ本

社ニ附屬セシムルヿ勝手タル可シ

第四十二節　會社ハ社員ノ集議ヲ以テ仲買其他ノ名目ノ有ヨリ相當ノ証據金抵當物ヲ預リ或ハ過怠金辨償金等ヲ取立ツ可キ規則ヲ設クルヿヲ得可シ

第十八條　株式並ニ入金高ヲ授受賣買スルノ定則ヲ明カニス

第四十三節　此條例ヲ奉シタル會社ノ社員其社則ニ戻ラザルニ於テハ其所持ノ株式又ハ入金高ヲ授受賣買スルヿ勝手タル可シ但定額會社ハ一株毎ニ株券成規囗標ト照ス可シヲ作リ毎券ニ番号ヲ附シ不定額會社ハ入金一口毎ニ証券同上ヲ作リ毎券ニ番號ヲ附スヘシ

第四十四節　社員其所持ノ株式又ハ入金高ヲ授受賣買スル時ハ必ス會社ノ頭取支配人ノ兼諾ヲ受ク可シ若之ヲ受ケズシテ授受賣買スルモ社員録ノ姓名ヲ書改メザル間ハ總テ故ノ記名人ヲ以テ現在ノ社員ト視做ス可シ

第四十五節　會社ニ負債アル社員其所持ノ株

内務省

式又ハ入金高ヲ授受賣買セントスル時ハ頭取支配人之ヲ拒ムノ權アル可シ但讓受人又ハ買主ヨリ之ヲ担當スヘキ旨ヲ約諾シ其確証ヲ立ツルモノハ例外タル可シ

第四十六節　社員死亡ノ故ヲ以テ其株式又ハ入金高ノ讓リ渡シヲ取扱フ所ノ代理人ハ假令社外ノ者タリトモ其取扱中ハ社員同様ニ視做シテ妨ケナカル可シ

第十九條　社員録ハ登記方及ヒ其効用

内務省

制限ヲ明カニス

第四十七節　會社ハ社員録ヲ作リ左ノ件々ヲ記載ス可シ

第一　定額會社ニテハ各社員ノ姓名住所職業及ヒ其所持ノ株數番號並ニ株金已納未納ノ内譯

不定額會社ニテハ各社員ノ姓名住所職業及ヒ其入金高番号

第二　各員入社ノ年月日

第三　各員退社ノ年月日

内務省

第四十八節　発起人ハ其會社ノ社員タルヿ当然タレバ其姓名ヲ社員録ニ記入シ之ニ調印スヘキハ勿論其後入社ヲ約シテ其姓名ヲ社員録ニ記入シ調印セシモノハ總テ之ヲ社員ト視做ス可シ

第四十九節　社員録ニ記名スル所ノ人々ハ其身分ニ制限ナシト雖モ其會社ノ事務ヲ管理スル官員ハ社員トナルヲ許サス

第五十節　若會社ニ於テ充分ノ事故ナクシテ漫ニ社員録ノ姓名ヲ除キ或ハ入社ヲ承諾セザル者ノ姓名ヲ記入シ或ハ退社セシモノヽ姓名ヲ取消サズ或ハ其取消ヲ格外ニ延引セシ等ノ事アリテ夫レガ為メ損害ヲ蒙ムル者アル時ハ其損失ヲ會社或ハ頭取又ハ之ヲ取扱ヒシ本人ヨリ辨償セシメ更ニ五十圓以下ノ罰金ヲ取立ツ可シ

第五十一節　右處分ノ後ハ會社ニ於テ速ニ社員録ヲ改正シ社員表成規因標ト照ス可シヲ作リ二十日以内ニ之ヲ地方官ニ差出ス可シ若此期ヲ怠ル時ハ其怠慢時間一日毎ニ五圓以下ノ罰

金ヲ取立ツ可シ

第二十條　社員表毎年上達ノ事ヲ明カニス

第五十二節　此條例ヲ奉シタル會社ハ毎年一度總集會ノ後二十日以内ニ會社ノ社員表成規目標ト照ス可シ及ビ資本計筭書成規目標ト照ス可シヲ作リ其地方官ヘ差出ス可シ地方官ハ之ヲ内務卿ニ送遞ス可シ但此社員表及ヒ計筭書ニテ左ノ件々ヲ詳明ニ示サンヿヲ要ス

第一　定額會社ニテハ資本ノ書上高（創立証書ニ記載セシ見込ノ資本高）及ヒ株数並ニ現在發行済ノ株数金高又其已納未納ノ内譯
不定額會社ニテハ社員ノ書上数（創立証書ニ記載セシ見込ノ社員数）並ニ現在ノ人員及ヒ厂金高

第二　定額會社ニテハ現在ノ社員及ヒ前年ノ社員表上達以来退社セシ者ノ姓名住所職業並ニ其所持ノ株数
不定額會社ニテハ現在ノ社員及ビ前年ノ社員表上達以来退社セシモノヽ姓名

住所職業並ニ其入金高

第三　定額會社ニテハ前年ノ社員表上達以來沒收セシ株數及ヒ其者ノ姓名

不定額會社ニテハ前年ノ社員表上達以來沒收セシ金高及ヒ其者ノ姓名

第五十三節　前節ノ社員表ヲ右期日内ニ差出サヾル時ハ其怠慢時間一日毎ニ五圓以下ノ罰金ヲ取立ツ可シ

第二十一條　資本高ヲ増加シ及ヒ株金高ヲ変更スルノ定則ヲ明カニス

第七十四節　此條例ヲ奉シタル定額會社ニ於テ特別ノ議定第七十六第七十七第七十八節ト照スヘシニ依リテハ其資本高ヲ増加シ又ハ在來ノ株金高ヲ合セ更ニ大高ノ株式ニ為スヲ得可シ又不定額會社ニ於テモ特別ノ議定ニ依リ社員ノ數ヲ増加スルヲ得可シ但其決議書ノ寫及ヒ仕譯書ハ之ヲ地方官ニ差出シ内務省ノ記録ヲ請フ可シ若其差出方ヲ怠ルトキハ第七十九節ノ罰則ニ從フ可シ

内務省

第五十五節　有限會社ニ於テ資本高ヲ増加セシ時ハ其保証ノ金高モ亦資本高ノ割合ニ随フテ増加スル事當然タリ

第二十二條　資本高ヲ減縮スルノ定則ヲ明カニス

第五十六節　會社ハ定額不定額ニ拘ハラズ特別ノ議定（第七十六第七十七第七十八節ト照ス可シ）ニ依リ其資本高ヲ減縮セント欲スル時ハ其減縮ス可キ因由ヲ詳記シ頭取之ニ記名調印シ別ニ決議書ノ寫並ニ減縮ス可キ資本高株金高各負入金高等ノ仕譯書ヲ添ヘテ地方官ニ請願ス可シ

第五十七節　會社資本ノ減縮ヲ請願スル時ハ其願書ヲ差出セシ日ヨリ免状ヲ受クルノ日迄其店ノ外面掲標（第十四條ト照ス可シ）ノ下ニ資本減縮願中ノ趣ヲ張出シ置ク可シ若其張出ヲ怠ル時ハ其怠慢時間一日毎ニ五圓以下ノ罰金ヲ取立ツ可シ

第五十八節　地方官右願書ヲ請取リシ時ハ會社ニ命シ其資本高ヲ減縮スルニ就キ若異論

アル者ハ或ル一定ノ期日報告書ノ日附ヨリ
三ヶ月以外ナル可シ迠ニ當會社ニ申出ツ可
キ旨ヲ各債主ニ報告セシム可シ
第五十九節 右期日ヲ過キテ債主異論ノ者無
キカ或ハ異論アル共會社ニテ其債主ヲ満足
セシムルノ所置ヲ為セシ上決シテ異論若無
キ旨ヲ其會社ヨリ保証セシ時ハ地方官其會
社ノ差出書ヲ添ヘテ其次第ヲ内務卿ニ上申
ス可シ
第六十節 内務卿ハ右上申ノ可否ヲ裁定シ其
免許ス可キモノハ内務省ノ記録ニ載セシメ
常例ノ手續ヲ以テ其免状ヲ交附ス可シ
第六十一節 内務省ノ記録ヲ受ケタル仕譯書
ノ寫ハ其地方及ビ都府ノ新聞紙ニ載セ又ハ
其他ノ方法ヲ以テ之ヲ世上ニ公告ス可シ
第六十二節 會社若シ債主ヲ満足セシムルヿ
能ハスシテ債主ヨリ告訴セシ時ハ裁判所又ハ
地方官ニ於テ會社ノ社員ニ命シ其異論ノ債
主ヨリ引受ケタル金高ヲ更ニ會社ニ入金セ
シメ以テ之ヲ辨償セシム可シ但有限會社ニ

於テ此辨償ノ為メ入金ス可キ所ノ金高其保証ノ金高ニ超ユル時ハ直ニ鎖店ノ命令ヲ下ス可シ

第六十三節　裁判所又ハ地方官ニ於テ會社其債主ヲ満足セシムルヿ能ハザルノ確証ヲ見出ス時ハ直ニ官命ヲ以テ鎖店セシムルヿアル可シ

第六十四節　會社資本減縮ノ免許ヲ得ズシテ其事ヲ行ヒ或ハ其負債高ヲ詐リ或ハ債主ノ姓名ヲ隠シ又ハ其他奸曲ノ所行アルトキハ法律ニ照シテ處分ス可シ

第六十五節　定額會社ニ於テ資本高ヲ減縮スルニハ在来ノ株高ヲ更ニ小高ニ改ムルモ或ハ株数ヲ減スルモ扨テ其社員ノ議定ニ任カス可シ又不定額會社ニ於テハ各員ノ入金高ヨリ相當ノ割合ヲ以テ之ヲ引去ルモ或ハ社員ノ数ヲ減スルモ亦總テ社員ノ議定ニ従フ可シ

第六十六節　有限會社其資本高ヲ減縮セシ時ハ其保証ノ金高モ亦資本高ノ割合ニ随フテ

内務省

之ヲ減縮スルヲ得可シ

第二十三條　社員納金滯リニ就キ處分ノ定則ヲ明カニス

第六十七節　創立証書及ビ會社定款ニ基キテ社員ヨリ會社ニ納ムル可キ一切ノ金子ハ總テ社員ノ負債ト視做ス可シ

第六十八節　社員若前節ニ從テ會社ノ要スル集金ヲ納メズシテ二度以上ノ期約ヲ違フ時ハ會社ニ於テ本人ニ告知ノ上其株金高又ハ入金高ヲ没收スルノ權アル可シ

第六十九節　社員入金滯リノ中ハ集議ニ當リ發言ノ權利ヲ有セシム可カラス

第二十四條　社員責任ノ制限ヲ明カニス

第七十節　此條例ヲ奉シタル所ノ會社閉鎖スルニ當リテハ其社員ハ現員（現在ノ社員）舊員（退社セシ所ノ人員）共創立証書ノ約束ニ從ヒ會社ノ負債及ビ鎖店ノ費用ヲ辨償センガ爲メ有限無限ノ

責任（第三第四節ト照ス可シ）ヲ担當シ會社ノ要求ニ應シテ入金セザル可カラス此入金（以下之ヲ割賦金ト称ス）ニ就キテノ制限ハ左ノ如シ

第一 社員ニシテ會社閉鎖ト決セシ時ヨリ満一ケ年以前ニ退社セシ者ハ創立証書ニ約定セシ保証ノ責任ヲ免カル可キモノトス

第二 退社ノ後満一ケ年ニ至ラズシテ會社閉鎖ノ事ヲ決セシ時其旧員タルモノハ責任ハ其退社ノ後會社ニテ負フタル債額ニ関係スルヿ無カル可シ

第三 右舊員ハ裁判所又ハ地方官ニ於テ現員ヨリ辨償ス可キ金高ノミニテハ尚會社ノ負債ヲ皆濟シ得サルヲ認メ之ニ指令スルニ非サレバ其割賦金ヲ拂フニ及バス

第四 有限定額會社ニ於テ若株金未納高アル時ハ即チ會社資産中ノ一部ト視做シ割賦金ノ外ニ之ヲ納メシムルヿ當然タル可シ

内務省

第五　有限會社ニ於テハ舊負現員ニ拘ハラス差出サシムル割賦金ハ創立証書ニ於テ約定シタル保証ノ金高ニ超ユ可カラス

第六　創立証書ニ記載セル約定ノ外ニテ各社員ヨリ會社ニ對シ保証シタル諸契約ハ總テ此條ノ例外ト視做ス可シ

第七　會社ヨリ社員ノ名義ニ對シ割渡ス可キ配當金等ハ固ヨリ社外債主ノ借財ヲ皆濟セシ上ニ非ラザレハ拂ヒ出スヲ得可カラス又割賦金ト差引勘定ヲ為ス可カラス

第二十五條　有限會社ニ於テ頭取支配人等ノ責任ヲ無限ニ定メ得ルノ權利及ヒ其制限ヲ明カニス

第七十一節　此條例ヲ奉シテ有限會社ヲ創立スルニ當リ發起人ノ協議ニ依リテハ頭取及ヒ支配人（社員中ヨリ撰抜シタルモノ）等ニ無限ノ責任ヲ負ハシム可キ約定ヲ為スヿヲ得

可シ但其約定ハ創立証書ニ之ヲ掲載ス可シ

第七十二節　前節ノ會社ニ於テ頭取支配人等ヲ撰挙スル時ハ右申渡書ノ内ニ其責任無限タル可キ旨ヲ明記ス可シ

第七十三節　前節ノ會社閉鎖スルニ當リ頭取支配人等ヲシテ無限ノ責任ヲ負ハシムルノ制限ハ左ノ如シ

第一　此頭取支配人等ハ會社閉鎖ノ時ニ當リ無限會社ノ社員ト同様ノ責任ヲ負フ可シ

第二　會社閉鎖ト決セシ時ヨリ前満一ケ年以内ニ退任セシ頭取支配人等ハ其在任中ニ係リタル會社ノ負債ニ就キ無限ノ責任ヲ負ハザルヲ得ス但退任後ノ負債及ビ鑛店ノ費用ニ係ル責任ハ尋常ノ社員ト一様ノ定限ニ従フ可シ

第三　會社ノ閉鎖前満一ケ年以外ニ退任セシ頭取支配人等ハ總テ尋常ノ社員ト一様ノ定限ニ従フ可シ

第四　頭取支配人等ノ責任ハ其無限タル

趣ヲ創立証書ニ掲クル氏會社閉鎖ノ時ニ當リ裁判所又ハ地方官ニ於テ其在任中ノ所行ヲ審察シ條理適當トシテ更ニ命令ヲ下スニ非ザレハ尋常ノ社員ト一様ノ定限ヲ超ユ可カラス

第二十六條　社員集議ノ諸則ヲ明カニス

第七十四節　總社員ノ定式集會ハ毎年一度又ハ一度以上例日ヲ定メテ之ヲ執行フ可シ其他總社員ノ集會ヲ要スル時ハ臨時集會ヲ開ク可シ

第七十五節　凡ソ社員集議ノ方法ヲ二様ニ分ツ一ヲ特別集議ト為シ一ヲ通常集議ト為ス

第七十六節　特別集議ハ社員招集ノ時預メ議事ノ大意ヲ告ケ知ラセ置キ其集會ニ當リ社則ニ照シ社員或ハ其代人ハ發言ヲ為サシメ復其集會後二十日以内ニ第二次ノ集會ヲ催シ此會ニ於テ總株數或ハ總入金高四分ノ三ヨリ少カラザル衆論ヲ採リ之ヲ決定スルモ

内務省

ノトス

第七十七節　若事急遽ニ係リ初會ニ於テ四分ノ三ノ協同ヲ得テ議長再ヒ第二次ノ集會ヲ要スルニ及ハズト視ル時ハ其初會ニテ之ヲ決定スルモ妨ナカル可シ

第七十八節　右特別集議ノ方法ヲ以テ決定ス可キ件々ハ左ノ如シ

第一　資本高株金高又ハ社員ヲ増減スルト事

第二　本店ヲ移轉スル事

第三　會社ノ名称ヲ改ムル事

第四　定款ノ箇條ヲ改正取捨シ或ハ更ニ新添ヲ立ツル事

第五　社中擔負ニ係ル契約ノ事

第六　會社ヲ閉鎖スル事

第七十九節　特別集議ニテ決定スル所ノ條件ハ必ス決議書ノ寫ヲ其地方官ヘ差出シ内務省ノ記録ヲ請フ可シ若決議ノ日ヨリ三十日ヲ過キテ其寫ヲ差出サヾル時ハ其怠慢時間一日毎ニ五圓以下ノ罰金ヲ取立ツ可シ

内務省

第八十節　右決議書記録済ノ後ハ之ヲ創立証書又ハ會社定款ト一様ニ視做ス可シ故ニ之ヲ各社員ニ配達スルニハ第九條ノ規程ニ據ル可シ

第八十一節　通常集議ハ總社員或ハ總株数總入金高ノ半数以上又ハ三分ノ二以上又ハ其他ノ割合ニテモ總テ社則或ハ臨時ニ定ムル適宜ノ方法ニ従ヒ議定スルヲ得ルモノトス

第八十二節　凡ソ集議ハ議長ニ於テ其可否ノ多少ヲ目算シテ之ヲ確定スルヲ得ルトイヘモ若五人以上ヨリ請求スル時ハ投票法ヲ用ヰテ可否ノ多少ヲ算計シ確定スルヲ當然トス

第八十三節　會社ニ於テ若預メ発言ノ制ヲ設ケザルモノハ株金高或ハ入金高ノ割合ニ應シテ其權利ヲ定ム可シ又預メ招集ノ制ヲ設ケザル時ハ十五日以前ニ報告シテ會合ヲ請フ可シ又臨時集會ノ催方ニ付其規則ヲ預定セザル時ハ社員五名以上ノ同意ヲ以テ總社員ヲ招集スルヲ得ルモノト為ス可シ又議長

内務省

撰挙ノ規則ヲ預定セザル時ハ出席ノ社員中ヨリ之ヲ抜擇ス可シ

第八十四節　會社ハ此條例ノ旨趣ニ悖戻スルノ權ヲ有セズ故ニ其悖戻ノ事件ハ集議ニ當リ之ヲ可ト為ス者衆多ナリト雖モ之ヲ否ト為ス少數ノ者ヲ抑壓スルノ權ナシトス

第二十七條　分店移店ニ付履行ス可キ定則ヲ明カニス

第八十五節　會社ニ於テ國内ニ分店ヲ取設ケ又ハ之ヲ移轉セント欲スル時ハ之ヲ其地方官ニ報告ス可シ若其分店ヲ取建テ或ハ移轉ス可キ所ノ地方他ノ管下ニ屬スル時ハ其先キノ地方官ヘモ同様報告ス可シ

第八十六節　會社ニ於テ外國ヘ分店ヲ取設ケント欲スル時ハ其地方官ヘ請願ス可シ地方官ハ内務卿ノ指令ヲ乞ヒ其指令ニ從テ許可スベシ但差遣ノ者海外行ノ免状請ヒ受ケ方等ハ定例ノ手續ニ從フヲ當然トス

第八十七節　會社特別ノ議定ニ依リ其本店ヲ

内務省

移轉セント欲スル時ハ第二十二條資本減縮ノ例ニ照シ第五十六節ノ手続ニ従ヒ請願ス可シ又同條中第五十七節ヨリ第六十四節迄ノ定規ハ總テ此移轉ノ條ニモ亦適用ス可キモノトス

第八十八節　會社移店免状ヲ受ケシ時若移轉先キノ地方他ノ管下ニ屬スル時ハ其免状ノ寫ヲ添ヘテ移店ス可キ旨ヲ其先キノ地方官ハ報告ス可シ

第二十八條　會社ノ記録縦覧ノ事ヲ明カニス

第八十九節　會社ノ社員録及ビ社中規則ニ係リタル諸記録ハ之ヲ本店ニ具ヘ置キ第九十一節ノ日間ヲ除クノ外毎日業務取扱中二時間以上ハ社員並ニ債主ノ閲覧ヲ縦ルス可シ

第九十節　若此閲覧ヲ拒ミシ時ハ其拒ミタル時間一日毎ニ五圓以下ノ罰金ヲ取立ツ可シ

第九十一節　會社ニ於テ諸簿冊調査ノ都合ニ依リ毎年三十日間ハ右縦覧ヲ停止スルヲ得

内務省

可シ但其停止ノ日限ハ豫メ之ヲ本店ニ掲ケ置ク可シ

第二十九條　質入帳簿ノ事ヲ明カニス

第九十二節　有限會社ハ其所有物ノ質入寄托等ヲ記ス可キ帳簿ヲ製シ置キ其度毎ニ物品ノ員数種類並ニ期限及ヒ質入先又ハ寄托先キノ姓名等ヲ記載ス可シ若其帳簿ヲ備ヘ置カザルカ或ハ其記載ニ詐偽誤脱アル時ハ五十圓以下ノ罰金ヲ取立ツ可シ

第九十三節　右質入寄托等ヲ登記シタル帳簿ハ第二十八條ノ定規ニ従ヒ社員債主ノ閲覧ニ供ス可キモノトス

第三十條　保険其外受托ノ會社毎年ノ計筭ヲ報告ス可キ事ヲ明カニス

第九十四節　有限ヲ以テ創立セル保険會社及ヒ其他諸物ノ寄托ヲ引受ケ或ハ救恤ヲ仕スル等總テ信任ヲ主トシテ營業スル所ノ會社

内務省

ハ其営業中ハ毎年二月八月ノ一日迄ニ前半ケ年一月ヨリ六月迄七月ヨリ十二月迄ノ計筭報告書成規四標ト照ス可シヲ作リ本店及ビ分店ノ見易キ場所ニ於テ之ヲ六ケ月間掲ケ置ク可シ若之ヲ掲ケサル時ハ其掲ケザル時間一日毎ニ五圓以下ノ罰金ヲ取立ツ可シ

第三十一條　検査請願ノ権及ヒ検査役ノ事ヲ明カニス

第九十五節　下ニ掲クル制限以上ノ社員ヨリ請願スルニ當リテハ地方官ヨリ官員ヲ命シ社中ノ諸件ヲ検査セシム可シ其制限ハ左ノ如シ

定額會社ハ　人員ニ拘ラズ總株数五分一以上ノ社員

不定額會社ハ　人員ニ拘ラズ總入金高五分一以上ノ社員

第九十六節　地方官ハ右願書ヲ請取リ其願意ヲ正當ト思量スルトキハ検査ノ官員ヲ差遣ス可シ

内務省
内務省

第九十七節　右検査役ハ會社ノ役人ヲシテ其管掌スル所ノ簿冊及ヒ一切ノ書類ヲ差出サシメ自在ニ之ヲ検閲シ或ハ會社ノ役人ヲシテ誓詞ヲ為サシメ之ヲ推糺スルノ権アル可シ若會社ノ役人簿冊書類ヲ差出スヿヲ拒ミ或ハ疑問ニ答ヘザル者アル時ハ五十圓以下ノ罰金ヲ其本人ニ命ス可シ

第九十八節　右検査役ハ検査終リシ時査明ノ事情及ヒ其意見ヲ書取リ復命ス可シ地方官ハ此書取リノ寫壱部ヲ内務省ヘ差出シ又壱部ハ會社ノ本店ニ達シ又壱部ハ請願人ニ渡ス可シ

第九十九節　内務省或ハ地方官ヨリ不時ニ官吏ヲ差遣シ會社ノ業務ヲ検査セシムル事アル可シ

第百節　會社ハ其業務ヲ検査セシメンガ為メ自ラ定式或ハ臨時ノ検査役ヲ命スルヿヲ得可シ此検査役モ其権利ニ於テハ本條第九十七節ノ如クナル可シ

第百一節　本條ニ掲ケタル検査役ノ取調ヘシ

事情書ハ其會社ニテ異論ナキ証トシテ之ニ
社印ヲ捺シタル以上ハ公裁上ノ証據トシテ
採用セラル可シ

第三十二條　往復書類送達方ノ事ヲ明
カニス

第百二節　凡テ會社ノ往復書類ヲ郵便ニ托ス
ル時ハ其遞送ノ時間ヲ量リテ差立ツ可シ若
右書類ノ正ニ達セシヤ否ノ証據ヲ糺ス時ハ
其表書ノ宛名ニ誤リ無カリシカ又ハ郵便規
則ニ違ハザリシカヲ証明スルヲ以テ充分ナ
リトス

第三十三條　社員定員以下ニテ營業ス
可キ制限ヲ明カニス

第百三節　此條例ヲ奉シタル會社ノ社員五
人以下ニ減少シタルトキハ直ニ其營業ヲ
廢停スルヲ定例ト為スト雖𪜈若シ社員一
同ノ協議ニ依リテハ其後一年間引續キ營
業スルヿヲ得可シ但此一年間ニ負フ所ノ

内務省

債額ハ右決議書ニ記名調印セシ者之ヲ一切
担當ス可シ

第三十四條　社員已納ノ金ヲ引取ル可
カラザルノ禁令ヲ明カニス

第百四節　社員ハ其株金又ハ入金ヲ會社ヨリ
引取ル可カラス若シ之ヲ犯スモノハ其引
取リシ金高ヲ會社ニ復セシメ別ニ五十圓
以下ノ罰金ヲ犯者ヨリ取立ツ可シ但頭取
支配人等之ヲ故縦スル時ハ其同高ノ罰金
ヲ命ス可シ

第三十五條　會社営業中ノ禁令ヲ明ラ
カニス

第百五節　凡ソ會社ノ発起人社員及ヒ頭取其
他ノ役人若シ共同ノ金銀ヲ私ニ費消シ
或ハ社名ヲ仮リテ自己ノ利益ヲ謀リ或
ハ不正ノ手形証書類ヲ以テ他人ヲ欺ク
等ノ如キ總テ奸偽ト視做ス可キ一切ノ
所行ハ法律或ハ社則ニ照シテ相當ノ罰

二處ス可シ

第三十六條　會社ノ決議書ハ公裁上ノ憑証ト為ス可キ事ヲ明カニス

第百六節　此條例ヲ奉シタル會社ニ於テハ其社員及ヒ頭取支配人ノ決議處分ヲ遺漏ナク簿冊ニ記載シ其毎會ノ議長之ニ記名調印シテ保有シ置ク可シ然ル時ハ後日其議定ヲ不正ト認ム可キ確証ヲ見出ス迄ハ公裁上ニ於テ此簿冊ヲ正當ノ憑証ト視做ス可シ

第三十七條　會社損失アル時ハ其後ノ利益配當ヲ差止ム可キ事ヲ明カニス

第百七節　會社若シ損失アリテ資本高不足シタル時ハ其後ニ生スル利益金ハ何ケ度ニテモ其不足ヲ補ヒ元高ニ復セシム可シ若シ此主意ニ戻リテ利益金ヲ配當スル時ハ公裁上ニ於テ其配當ノ金高ハ各社員ノ負債ト視做

内務省

シ相當ノ利子ヲ附シテ會社ニ辨償セシム可
シ

第三十八條　中裁人ヲ定メ得ルノ權利
ヲ明カニス

第百八節　此條例ヲ奉シタル會社ハ現在將來ヲ問ハズ本社ト他ノ會社或ハ他人トノ間ニ起ル所ノ爭論疑問等ヲ判決スル爲メ社外ノ中裁人ヲ撰ミ之ニ依頼スル事ヲ得可シ此中裁人ニ委托スルノ權利制限ハ其會社特別ノ議定ヲ以テ之ヲ取極ム可シ

第三十九條　負責人ノ事ヲ明カニス

第百九節　此條例ヲ奉シタル會社閉鎖ノ時ニ於テ創立証書ノ約定及ビ第二十四條ノ制規ニ從ヒ會社ノ要求ニ應シテ割賦金ヲ拂フ可キ者之ヲ負責人ト称ス

第百十節　右負責人タル者ハ會社閉鎖ノ時ニ當リ裁判所又ハ地方官又ハ跡引請役ニテ之ヲ決定スルトイヘトモ當然其責ニ任ス可キ條理

內務省

アル者ハ右決定前ニテモ亦之ヲ負責人ト称ス可シ

第百十一節　前節ノ負責人ハ入社ノ初メヨリ其會社ニ對シテ債ヲ負フタル者ト視做ス可キヲ以テ若會社ノ閉鎖ニ當リ負責人ノ身代其割賦金ヲ辨スルニ足ラサルノ疑アル時ハ會社ニ於テ其者ノ資産ヲ抵當ト為スヿヲ得可シ

第百十二節　會社閉鎖ノ前後ヲ論セス社員其所有ノ株式ヲ他人ニ賣渡シ又ハ讓渡サントスナセシ時若頭取支配人又ハ跡引受役ニ於テ其社員ノ所為ハ全ク其責任ヲ免カルヽ為メノ目的ヨリ出タルモノト視ル時ハ之ヲ拒ムノ権アル可シ仮令其賣渡讓渡ノ後ニテモ裁判所又ハ地方官ニ於テ適當トスル時ハ舊社員ヲ負責人ト定ム可シ

第百十三節　若負責人タル者其姓名簿ニ登記スル前後ニ於テ死去セシ時ハ其代理人相續人後見人等總テ其跡式ヲ引受ケタル者ヲ負責人ト視做シ其責ヲ担任セシム可シ

内務省
内務省

第百十四節 若負責人ト同時ニ於テ身代分散ニ至リシ時ハ會社即債主タルノ權利ヲ以テ其者ノ拂フ可キ割賦金ノ高ニ應シ他ノ債主ト同シク配當ヲ受クルヲ得可シ若シ女子ニテ負責人ト為リ他家ニ嫁スル時ハ其夫タル者ヲ負責人ト視做シ其責ヲ担任セシム可シ

第四十條 會社官命ニテ閉鎖スルノ定則ヲ明カニス

第百十五節 此條例ヲ奉シタル會社左ノ場合ニ當リ裁判所又ハ地方官ニ於テ其事實ヲ推糺シ條理正當ト視ルトキハ其會社ニ鎖店ノ命令ヲ下ス可シ

第一 會社特別議定ニ依リ裁判所又ハ地方官ノ命令ヲ奉シ閉鎖スルヲ要用トナシ其命令アランヿヲ請願シタル時

第二 會社創立後一ケ年ヲ経テ尚未タ開業セサルカ若クハ開業後一ケ年間休業シタル時

第三 開業後社員五名以下ニ減少シタル

内務省

時

第四　會社ノ債主ヨリ會社ヲ相手トシテ訴訟ヲ起シ裁判所又ハ地方官ニ於テ債主ヲ以テ有理ト判決スルト雖モ會社其負債ヲ辨償シ得サルカ又ハ債主ノ心ヲ滿足セシムル丈ケノ抵當ヲ出シ得サル時

第五　其他何等ノ事故ニテモ裁判所又ハ地方官ノ意見ヲ以テ鎖店ヲ命スルヲ條理適當ト定ムル時

第百十六節　會社鎖店ノ命令ヲ請願スル時ハ其願書ヘ閉鎖セント欲スルノ理由ヲ詳記シ願取ハ加論社員三分ノ二以上ニテ記名調印シ之ニ決議書ノ寫ヲ添テ裁判所又ハ地方官ニ差出スヘシ

第百十七節　裁判所又ハ地方官ニテ會社ノ業務ヲ閉鎖セシムルハ會社ヨリ請願書ヲ其廳ニ於テ受取リシ日又ハ裁判所又ハ地方官ノ特命ニ出ツルモノナレハ其命令書會社ニ到達ノ日ヲ以テ其起初ト視做スヘシ

内務省

第百廿八節 會社已ニ右請願書ヲ差出シタル後ハ未タ命令アラサル前ナリ𪜈裁判所又ハ地方官ノ許可ヲ得スシテ其資産ノ処分株券ノ擬度賣買其他社員ノ進退等都テ諸般ノ変更ヲ為ス可カラス

第百廿九節 會社ノ債主一名又ハ二三名ニテ會社ヲ相手トシテ訴訟ヲ起シ裁判所又ハ地方官ヨリ會社ニ鎖店ヲ命スル𪜈債主惣体連署シテ出訴シタルモノト同様債主一同ノ権利ヲ保護スルヿ勿論タルヘシ

内務省

第百三十節 裁判所又ハ地方官ハ已ニ鎖店ノ命令ヲ下シタル後ニテモ會社又ハ其債主及ヒ関係人等ノ請願ニ由リ情實處審ノ上事理正當ト視ル時ハ暫時閉鎖店ノ猶豫ヲ命シ或ハ全ク鎖店ノ命令ヲ取消スヿアル可シ

第百三十一節 裁判所又ハ地方官ニ於テ會社ニ鎖店ノ命令ヲ下サントスル時ハ其會社ニ関係アル債主或ル一定ノ期日〔此期日ハ公告書ノ日附ヨリ三ケ月以外ナルヘシ〕迄ニ其金高及其請取ル可キ因由ヲ詳記シ之ヲ其所ニ

内務省

差出ス可キ旨揭示及ヒ新聞紙等ヲ以テ全國一般ニ公告スル等ノ手續ヲ為ス可シ

第百二十二節　裁判所又ハ地方官ハ右期日後ニ至リ各債主ヨリ差出シタル書面ト會社ノ簿記類トヲ照合調査シテ更ニ債主ノ姓名錄ヲ作ル可シ

第百二十三節　裁判所又ハ地方官ニ於テ會社ニ鎖店ノ命令ヲ下シタル後ハ速カニ會社ノ社員錄ヲ差出サシメ其内ニテ在社退社ノ人々ヲ區別シ又其代理人相續人後見人等當然ノ責任ヲ担當ス可キ人々ヲ定メテ又更ニ負責人ノ姓名錄ヲ作ル可シ

第百二十四節　裁判所又ハ地方官ハ會社ニ鎖店ノ命令ヲ下シタル後其命令書ノ寫（會社ノ請願ニ出ルモノナルトキハ其決議書共）ヲ添テ之ヲ内務卿ニ報告ス可シ

第百二十五節　裁判所又ハ地方官ハ會社ニ鎖店ヲ命シタルトキ其會社ノ後負債ハ社員ノ中ヨリ相當ノ人物一名又ハ数名ヲ撰挙シテ之ヲ跡引受役ニ命シ會社鎖店ノ諸務ヲ取扱ハ

ニ於テハ組會社ノ役員又ハ社員ノ中ニ相當
ノ人物無キトキハ裁判所又ハ地方官ヨリ官吏
ヲ差遣シ其事ヲ執ラシメ或ハ社外ノ者ヲ撰
ヒ跡引受後ニ命スルヿアルヘシ

第百二十六節　裁判所又ハ地方官ニテ跡引受
後ヲ命スル時ハ本人ヨリ相當ノ保証物ヲ差
出サシムルカ或ハ保証人ヲ立シメ若本職中
本人辨償ス可キヿ起ル時ハ其保証物ヲ以テ
辨償ニ充テ或ハ保証人ニ其辨償ヲ係ス可シ

第百二十七節　裁判所又ハ地方官ニテ跡引受
後ヲ命シタル後ハ會社ノ頭取支配人其職ヲ
継クヘシ但跡引受後ノ請願ニ依テハ尚在職
セシムルヿアルヘシ

第百二十八節　跡引受後ハ其會社頭店ノ命令
ヲ受ケタル趣ヲ其本店府廳ノ地方ノ新聞紙
ニ載セ又ハ其他ノ方法ヲ以テ少クトモ六十日
間之ヲ世上ニ布告スヘシ

第百二十九節　跡引受後ヲ命シタル後ハ其裁
判所又ハ地方官ヨリ會社ノ役員及ヒ社員等
ニ指図シテ其會社ノ所有ニ属スル金銀動産

内務省

不動産並ニ諸證券証書類等悉皆右臨引受役ニ引渡サシメ又臨引受後ニ命シテ之ヲ監護セシムヘシ

第百三十節 右臨引受役余儀ナキ事故アリテ辞職シ或ハ死去シ或ハ裁判所又ハ地方官ヨリ其職ヲ免黜スル等ノヿアル時ハ其裁判所又ハ地方官ニテ相當ノ者ヲ撰擧シテ其臨役ニ命スヘシ

第百三十一節 右臨引受役ノ給料ハ之ヲ命スル裁判所又ハ地方官ニテ其相當トスル處ニ随ヒテ一定ノ高ヲ定メ會社ノ資産中ヨリ之ヲ給与スヘシ

第百三十二節 臨引受後ハ會社ニ屬スル諸所有物ヲ監護シ且ツ裁判所又ハ地方官ノ許可ヲ得タル上ニテ左ノ件々ヲ執行スル權利アルヘシ

第一 會社ノ名目ヲ以テ原告又ハ被告トナリ訴訟ヲ受クル事

第二 鎖店ノ便益ヲ謀ルカタメ一時其業ヲ營ム事

第三 會社ニ属スル所有物ノ全部又ハ其幾部分ヲ賣却シ或ハ其所有物ヲ抵當トナシ要用ノ金子ヲ借用スル事

第四 會社ノ負債人ノ中若破産分散スルモノアルトキハ本人ヨリ會社ニ納ムヘキ金高ヲ證明シ他ノ債主ト同シク其配當ヲ受ケ又ハ其抵當ノ資産ヲ引取ル事

第五 其他都テ會社ノ資産ヲ分配スル等ニ係ハル件々ヲ取扱フ事

第百三十三節 裁判所又ハ地方官ハ時宜ニ係リ跡引受役ニ命シテ積金及ヒ負債人ノ姓名録ヲ作ラシムルヿ有ルヘシ 第百二十二第百二十三節ト照ラスヘシ

第百三十四節 跡引受役ハ何時ニテモ負債人ノ姓名録ニ記入シタル人々ヨリ其割賦金ノ全額又ハ其内ノ幾部分ヲ取集スルヿヲ得ヘシ但之ヲ取集スルトキハ少クモ十五日前ニ其旨ヲ通達スヘシ

第百三十五節 跡引受役右割賦金ヲ取集スルトキハ負債人ノ内或ハ其要需ニ應スル能ハサルモノアルヘキヲ量リ其費用ノ金高ヘ余分相當ノ見込高ヲ加フルモ敢テ妨ケナシトス

内務省

第百三十六節　跡引役後ハ會社ノ資産又ハ負責人ノ割賦金ヲ以テ會社ノ負債ヲ辨償シ其他鎖店ノ諸入費ヲ仕拂ヒ若殘餘ノ金高又ハ物品アル時ハ此配当ヲ受クヘキ権利有ル人々ニ公平ニ之ヲ分与スヘシ

第百三十七節　負責人ノ中若會社ノ需用ニ應シ其割賦金ヲ納メサルモノアリテ跡引役後ヨリ之ヲ督促スルトモ尚其納金ヲ怠ル時ハ裁判所又ハ地方官ニ於テ其情實審糺ノ上條理適當ト思考スル時ハ一般ノ規則ニ準シ其人ニ身代限ヲ命スヘシ

第百三十八節　裁判所又ハ地方官ハ會社閉鎖ノ時ニ當リテ其資産ヲ尽スモ尚其負債ヲ辨償スルニ足ラサルト認ムル時ハ豫メ鎖店ノ諸入費及ヒ跡引役後ノ給料見込高ヲ先ツ其資産中ヨリ引去ル可キ旨ヲ跡引役ニ指令スヘシ

第百三十九節　會社鎖店ノ事務既ニ結了セシ時ハ裁判所又ハ地方官ヨリ其會社ニ解散ノ命ヲ下スヘシ

第百四十節　裁判所又ハ地方官ヨリ會社ニ解散ヲ命セシ時ハ直ニ其命令書ノ寫ヲ添テ之ヲ内務卿ニ報告スヘシ

内務省

第四十一條　會社自ラ閉鎖スルノ定則ヲ明カニス

第百四十一節　此條例ヲ奉シタル會社ニ於テ左ノ場合ニ當リテハ自ラ閉鎖スルコトヲ得ヘシ

第一　會社創立ノ初メ其定款ニ於テ約定セシ處ノ期限ニ至リ特別議定ニ從フテ閉鎖セシト決スル時

第二　會社ニ不虞ノ事変起ルカ其利益ナキカ又ハ負債增加シテ其業務ヲ永續シ得可ルカ其他何等ノ事由ニテモ特別ノ議定ニ由リテ閉鎖スルヲ便宜ナリト決スル時

第百四十二節　會社特別議定ニ因リ閉鎖セシト決スルトキハ其閉鎖スヘキ因由ヲ詳記シ其決議書ハ嘱ヲ添テ地方官ニ報告ス可シ地方官又之ヲ内務卿ニ報告ス可シ

第百四十三節　地方官ニ於テ右報告書ヲ受取リシ上ハ其會社ニ關係アル債主ヲ一定ノ期日（此期日ハ公告書ノ日附ヨリ三ヶ月以外ナル可シ）迄ニ其全高及取方ヲ右會社ニ請求ス可キ旨掲示及ヒ新聞紙等ヲ以テ全國一般ニ公告スルノ手續キヲ為ス可シ

第百四十四節　會社ハ自ラ閉鎖セシト決シタル

議定ノ旨趣ヲ本店分店ノ地方ノ新聞紙ニ廣告セスハ其他ノ方法ヲ以テ少クトモ六十日間之ヲ世上ニ公告スヘシ

第百四十五節 會社閉鎖ト決スル時ハ其決議ノ日ヨリ鎖店ノ件ニ就キ肝要ナルモノヲ除クノ外都テ其業務ヲ閉止スヘシ

第百四十六節 會社閉鎖ト決セシ後ハ其資産ノ處分株式ノ授受賣買其他社員ノ進退等諸般變更ニ係ル事ハ都テ跡引受役ノ承諾ヲ得サレハ之ヲ執行ス可カラス若其承諾ナクシテ之ヲ執行セシモノハ跡引受役其責ニ任ス可カラサルハ勿論公義上ニテモ之ヲ不正ノ所為ト視做ス可シ

第百四十七節 會社閉鎖ト決スルトキハ其集會ニテ從来ノ役員又ハ社員ノ中ヨリ相当ノ者一名若クハ數名ヲ撰擧シテ之ヲ跡引受役トナシ鎖店ノ諸務ヲ一切担任セシム可

内務省

シ若跡引受後ノ内病死或ハ辭職其他ノ事故アリテ缺員ヲ生スルトキハ復タ社員集會ニテ其跡役ヲ撰任ス可シ

第百四十八節　跡引受後ノ給料并ニ處務ノ權限ハ之ヲ撰挙スル集會ニテ豫メ取極メ置ク可シ

第百四十九節　右跡引受後ヲ命スル上ハ頭取支配人ハ其職ヲ退リ可シ但社員ノ協議又ハ跡引受後ノ請求ニ依リテハ尚在職セシムルモ

内務省

妨ケナシトス

第百五十節　跡引受後ハ會社ノ債主及ヒ負債人ノ姓名錄ヲ定ムルノ權アル可シ但之ヲ定ムルニハ官命ノ鎖店ニ當リ裁判所又ハ地方官ニテ執行スル方法ニ從フヘシ

第百五十一節　本條ノ跡引受後ハ總社員ノ許可ヲ得タル上ニテ官命跡引受後ト同様第百三十二節ニ掲ケタル第一第三第四第五ノ件ヲ處分スルノ權利ヲ有ス可シ但同節第二鎖店ノ便宜ヲ謀ルカ為メ一時其業ヲ營ム事

内務省

ニ至リテハ予メ地方官ノ許可ヲ得サレハ施行
スルヲ得可カラス
第百五十二節　凡テ會社ノ負責人ハ跡引受後
ノ差圖次第其責任ノ多少ニ應シテ會社ニ割
賦金ヲ納ム可シ
第百五十三節　清算ノ跡引受後右割賦金ヲ收
集スルニ當リテハ官命跡引受後ト同様第百
三十五節ノ主意ニ依リ其分相當ノ見込高ヲ
加フルモ法ニ於テ妨ケ無シトス
第百五十四節　會社鎖店ノ諸費用並ニ跡引受
役ノ給料等ハ會社ノ資産及ヒ集金ヲ以テ之
ヲ仕拂フ可シ但之ヲ引去ラサル間ハ他ノ負
債ヲ償却ス可カラス
第百五十五節　跡引受後ハ其權限外ノ事務ヲ
處分ス可キ許可ヲ得ルカ為メ若クハ他ノ目途
ヲ達スルカ為メニ適當ト思考スルトキハ何時
ニテモ社員ノ集會ヲ催スコトヲ得可シ若シ鎖店
ノ事務一ケ年以上ニ亘ルトキハ初年ノ終リニ集
會ヲ催シ其後ハ毎年ノ末ニ集會シテ其前年
ノ事業及ヒ諸計算ノ始末ヲ告知ス可シ

内務省

第百五十六節　會社閉鎖ノ事務完結セシ時跡引受役ハ其事務ヲ取扱ヒシ順序並ニ明細ナル出納計算簿ヲ作リ負責人総員ヲ集會シテ之ヲ公示シ尚自ラ其委細ヲ演説スヘシ但此集會ノ趣意及ヒ場所月日ハ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ少クトモ一ヶ月前之ヲ世上ニ公告スヘシ

第百五十七節　前節ノ集會畢リシ上ハ跡引受役ヨリ三日中ニ其始末ヲ明記シ地方官ニ報告スヘシ但此報告書ノ日附ヨリ六ヶ月ヲ経テ其會社全ク解散セルモノト登記セラル可シ

第百五十八節　地方官右報告ヲ受ケシ時ハ直ニ之ヲ内務卿ニ報告ス可シ

第百五十九節　若跡引受役第百五十六節ノ集會後三日ヲ経テ報告書ヲ差出サヾル時ハ其後ノ定限時間一日毎ニ五圓以下ノ罰金ヲ総負責人或ハ跡引受役ニ科スヘシ

第百六十節　會社特別ノ議定ニ依リテハ其債主総員ニ跡引受役ヲ撰任スルノ権義ヲ委任

内務省

シ或ハ債主等ト協議シテ跡引受後ノ権限及
ヒ其所務ノ方法ヲ定ムル事アル可シ但右委
任ノ趣意ニ基キテ債主ノ施行セル権義ハ即
會社ノ自ラ為セルト同様ニ心得可シ

第百六十一節　自ラ閉鎖スル所ノ會社ト債主
トノ間ニ取結フ所ノ約定ハ會社特別ノ議定
ニテ承諾セシ上ハ之ヲ以テ総員責人ヲ束制
シ得可ク又債主ノ人員並ニ其金高四分三以
上ノ者承諾セシ上ハ之ヲ以テ総債主ヲ束制
シ得ヘシ

内務省

第百六十二節　右責人ト債主トノ双方ニ於
テ四分三以上ノ決議ニ従ヒ取結ヒタル約定
ハ之ヲ正当確実ノモノト視做スヘシ然リト
雖モ若シ責人債主ノ内此約定ニ服セサルモ
ノアリテ約定済ノ日ヨリ一ヶ月以内ニ告
訴スル時ハ裁判所又ハ地方官ニテ其情理ヲ
審察シ原告ヲ正当ト視ルニ於テハ務ハ其約
定ノ條件ヲ改正シ又ハ之ヲ取消サシムル事
アルヘシ

第百六十三節　舊負ノ割賦金ト第二十四條及ヒ（照ス可シ）

内務省

責任無限ノ約定アル頭取支配人ノ罰贖金十五圓ニ
（條ト更スヘシ）ハ裁判所又ハ地方官ニ請願ノ上其命令
ヲ受クルニ非サレハ會社ニ於テ之ヲ收集
スルヲ得ス
第百六十四節　裁判所又ハ地方官ニ於テ會社
ノ自鎖店ニ由リ其債主ノ權利ヲ害スルト視
ル時ハ其遅ニテモ官庫鎖店ノ順序ニ從ヒ之
ヲ處分シ其自鎖店ノ權利ヲ取消スヘシ
第百六十五節　會社總局ノ集會後六ヶ月以内
ニ於テ若債主等ハ負責人ヨリ第百六十二節
ノ事情ヲ除クノ外異論起リ告訴スル者アル
件ハ裁判所又ハ地方官ニ於テ其告訴遅延ノ
事情ヲ推究シ之ヲ條理アリト視ル件ハ其原
告人ノ權利ヲ保護シ更ニ其事件ヲ覆審スル
事アルヘシ但右集會後六ヶ月ヲ過ル後ハ假
令何等ノ事情アルモ之ヲ採用セサルヘシ

第四十二條　會社閉鎖ニ付一般ノ定則
ヲ明カニス
第百六十六節　會社ノ社員及ヒ債主等ハ裁判

所又ハ地方官ヨリ下シタル鎖店ノ命令或ハ鎖店一件ニ付其後下ス所ノ命令ニ服セサルトキハ司法省裁判所ヘ控訴スルコトヲ得可シ

第百六十七節　會社負債ヲ辨償スルニ當リ債主ニ對シ偏頗ノ所行アルトキハ裁判所又ハ地方官ニ於テ其事ノ已定未定ニ拘ハラス之ヲ匡正シテ公平ノ處分ヲ為ス可シ

第百六十八節　會社ノ計算書類其他一切ノ記録ハ會社解散ノトキニ當リ官命鎖店ナレハ裁判所又ハ地方官ニテ其記録ノ管守人ヲ命シ自鎖店ナレハ總社員ノ衆議ヲ以テ其管守人ヲ定ム可シ但解散ノトキヨリ三ヶ年ヲ過クレハ此管守人ハ其責任ヲ免カル可シ

第百六十九節　凡ソ會社ノ鎖店ニ當リ其社員タル者會社ノ資産ヲ自己ノ所有トナシ或ハ之ヲ隠匿シ又ハ會社ノ負責ヲ脱セント謀リ其他一切奸偽ノ所行アルトキハ法律或ハ社則ニ照ラシテ之ヲ論スルノ外其私曲ニ係ル金高ハ相當ノ利息ヲ加ヘ之ヲ其本人ヨリ辨償セシム可シ

第百七十節　會社ノ鎖店ニ當リ舊社現在ノ差

内務省

別ナリ頭取支配人跡引受役及ヒ其他ノ役人等其取扱ノ失錯ニ依リテ會社ニ損耗ヲ負ハシメ其他不正ノ出納ヲ為シ又ハ會社ノ所有物ヲ私借スル等總テ會社ニ對シテ違約背信ノ罪ヲ犯シタル時ハ法律若クハ社則ニ照シテ之ヲ論スルノ外其失錯又ハ私曲ニ係ル金高物品ハ相當ノ利息ヲ加ヘ之ヲ其本人ヨリ辨償セシム可シ

第四十三條　請願及ヒ報告書類ノ上達方並ニ印税ノ事ヲ明カニス

第百七十一節　會社ヨリ地方官又ハ裁判所等ヘ差出ス可キ諸般ノ請願及ヒ報告書類ハ都テ本書寫ヲ併セテ三通ヲ要ス可シ但シ其寫モ亦必ス本印ヲ捺ス可シ

第百七十二節　創立証書及ヒ會社定款ノ本書ハ証券界帋ヲ用フ可ク又株券及ヒ入金証券ハ印税規則中第二則ノ一類ニ從ヒ印税ヲ納ム可シ

第四十四條　記録手數料ノ定則ヲ明カ

内務省

二ス

第百七十三節　凡條例ヲ奉スル會社ハ第七條ノ手續ニ從ヒ創立証書及ヒ會社定欵ヲ内務省ノ記録ニ載セ其他特別議定ノ條件ヲ記録スルニ當リテハ左ノ定則ニ照ラシテ記録手数料ヲ納ムヘシ

定額會社ノ記録手数料

資本金千圓ニ充タサル高ヲ以テ創立スル會社ハ創立証書及ヒ會社定欵ヲ記録スル

金壹圓

資本金千圓ヨリ以上ヲ以テ創立スル會社ハ右壹圓ノ外ニ左ノ割合ニ應シテ其高ヲ増加ス可シ

資本金千圓ヨリ以上五千圓ニ充タサルモノハ千圓毎ニ

金壹圓

同五千圓ヨリ以上壹万圓ニ充タサルモノハ千圓毎ニ

金五拾銭

内務省

同壹萬圓ヨリ以上拾万圓ニ充タサルモノハ千圓毎ニ
金貳拾錢
同拾萬圓ヨリ以上ハ千圓毎ニ
金五錢

會社開業ノ後其資本高ヲ増加スル時ハ其増加高ヲ從前ノ資本高ト通算シテ右ノ割合ニ從ヒ之レヲ收ル可シ

特別議定ノ條件ヲ記録スル時ハ一度每ニ
金五拾錢

不定額會社ノ記録手數料

創立証書ニ定メタル社員十人ニ充タサル會社ハ創立証書及ヒ會社定欵ヲ記録スルニ付
金壹圓

社員ノ定限十人ヨリ以上ナル會社ハ右壹圓ノ外ニ左ノ割合ニ從ヒ其高ヲ増加ス可シ

社員十人ヨリ以上百人ニ充タサルモノハ十人毎ニ

内務省

金五拾銭
同百人ヨリ以上五百人ニ充タサルモノハ
五十人毎ニ
金三拾銭
會社開業ノ後更ニ社員ヲ増加スル片ハ前社員ト通算シテ右ノ割合ニ從ヒ之ヲ收ム可シ
特別議定ノ條件ヲ記録スル片ハ一度毎ニ
金五十銭
第百七十四節 右記録手數料ハ地方官ニテ之ヲ取立テ内務卿指令ノ手續ニ從テ處分ス可シ

第四十五條 罰金ノ處分ヲ明カニス
第百七十五節 此條例中ノ罰金ハ各地ノ裁判所又ハ地方官ニテ之ヲ取立テ司法卿ノ指令ニ從テ處分ス可シ

第四十六條 條例改正ノ事ヲ明カニス
第百七十六節 日本政府ハ此條例ノ箇條ヲ廣

内務省

踐セシメ若故障ノ廉アラハ便宜之ヲ改正シ
或ハ之ヲ加除ス可シ但此條例ニ從テ一度記
録手数料ヲ納メタルモノハ此後ノ改正加除
ニ就キ官命ニテ其社則ヲ變更セシムルヿア
ルモ再ヒ記録手数料ヲ納ムルニ及バス

會社條例附録

第一條　在來官許ノ會社ニ本條例ヲ適
用スル事ヲ明カニス

第一節　在來ノ官許會社ハ本條例発行ノ後ニ
テモ從前ノ社則ニ從テ其業ヲ保續スルヲ得
可シ但兼テ其社則ニ社員責任ノ定限ヲ掲載
セザルモノハ其鎖店ニ當リ社員一同無限ノ
責任ヲ負担ス可キモノト視做シ從前一般ノ
身代限規則ニ從テ處分ス可シ又其社則ニ
社員責任ノ定限ヲ掲載セルモノハ其鎖店ニ

寫

當リ社則ニ従フテ之ヲ履行ス可シ

第二節 本條例発行ノ後モ在来ノ官許會社ハ社員責任定限ノ有無ニ拘ハラス従前ノ社則ニ従ヒ營業スルヲ得ルト雖モ本條例中左ノ箇條ハ之ヲ其會社ニ適用セシムベシ故ニ其會社ハ従前ノ社則中左ノ箇條ニ抵觸スルモノ有レバ速ニ之ヲ改正シテ其旨ヲ地方官ニ報告スベシ地方官ハ之ヲ内務卿ニ上申シ同卿ハ之ヲ内務省ノ記録ニ載セシム可シ但此場合ニ於テハ記録手數料ヲ納ムルニ及バズ

第十一條　外國人民ノ制限

第十二條　金券及通用手形発行ノ禁令

第十四條　掲標ノ定規

第十五條　社印文字ノ定規

第十六條　印鑑上達ノ定則

第二十條　社員表毎年上達ノ定則

第廿一條　資本高ノ増加及拆金高ノ變更

第廿二條　資本高減縮ノ定則

内務省

第廿七條　分店移店ニ付テノ定則

第廿八條　會社ノ記錄縱覽ノ定則

第廿九條　質入帳簿ノ定則

第三十五條　會社營業中ノ禁令

第三十七條　會社損失アル時ハ其後ノ利益配當ヲ差止ムベキノ定則

第四十三條　請願及報告書上達方ノ定則

第四十四條　記錄手數料ノ定則

第三節　從前責任ノ定限ヲ設ケタル會社ノ内其責任ヲ株金高ニ限リタルモノ又ハ別ニ保證ノ約束アリテ其金高ノ割合株金高入金高ノ半數ニ足ラザルモノハ本條例第四節ノ制限ニ從ヒ速ニ之ヲ改正シテ其旨ヲ地方官ニ報告ス可シ但地方官ノ處分并記錄手數料ノ事ハ前節ト同樣タル可シ

第四節　本條第二第三節ノ報告ヲ此條例發行ノ日ヨリ六ケ月以内ニ差出サヾル時ハ其後ノ怠慢時間一日毎ニ五圓以下ノ罰金ヲ取立

内務省

ツ可シ

第五節　在來ノ官許會社前節ノ旨趣ニ依リ其社則ヲ改正セシ後再ヒ之レヲ改正セント欲スル時ハ下條第六節ニ照シテ必本條例ニ據ラシム可シ但資本高及ヒ社員ノ増減又ハ分店扱店ノ事ヨリ其社則書中ノ文字ヲ變更スルガ如キハ此限ニ在ラザルモノトス

第二條　在來官許ノ會社ニテ本條例ニ遵ヒ社則ヲ改正スルノ定則ヲ明カニス

内務省

第六節　在來ノ官許會社本條例ヲ奉シテ社則ヲ改正セント欲スル時ハ會社定款ノ外ニ左ノ條件ヲ明記シタル証書ヲ添ヘ之ヲ其地方官ニ差出シ内務卿ノ免許ヲ請フ可シ但此場合ニ於テハ特例トシテ社員定員[五人]以下ニテモ其社則ヲ改正シ本條例ヲ践行スル事ヲ許ス可シ

有限定額會社ハ

第一　會社ノ名稱並ニ名稱ノ上ニ有限ノ二字

内務省

第二　會社本店ノ在ル所ノ府縣ノ名及
ビ地名番号
第三　會社ノ業体
第四　資本ノ金高及分割シタル株數並
一株ノ金高
第五　各社員ハ此度株金高ニ應シ別ニ
保証ノ金高ヲ約定セルヲ以テ會社閉
鎖ノ事起ル時ハ會社ニ属スル負債ノ
高並ニ鎖店ノ費用ヲ辨償センカ為メ
會社現存資産ノ外右保証ノ金高ヲ超
エザル迄ハ入金セシム可シ若社員退
社ノ後一年間ニ會社閉鎖スル時ハ其
在社中ニ係リタル會社ノ負債及ビ鎖
店ノ費用ハ之ヲ担任セシムルコト現
在ノ社員ト同様タル可キ旨
但此証書ノ記名人ハ其姓名ノ上ニ
所持ノ株數ヲ掲ク可シ
有限不定額會社ハ
第一　第二　第三　前節ト
同シ

第四―社員ノ數

第五―各社員ハ此度其入金高ニ應シ別ニ保証ノ割合ヲ約定セルヲ以テ會社閉鎖ノ事起ル時ハ會社ニ屬スル負債ノ高並ニ鎖店ノ費用ヲ辨償セシカ爲メ會社現存資產ノ外右割合ノ金高ヲ起エザル迄ハ入金セシム可シ若社負退社ノ後一年間ニ會社閉鎖スル時ハ其在社中ニ係リタル會社ノ負債及ビ鎖店ノ費用ハ之ヲ担任セシムル事

現在ノ社員ト同樣タル可キ旨

但此証書ノ記名人ハ其姓名ノ上ニ入金ノ高ヲ掲ク可シ

無限定額會社ハ

第一　會社ノ名稱

第二　會社本店ノ在ル所ノ府縣ノ名及ビ地名番号

第三　會社ノ業体

第四　資本ノ金高及ビ分割シタル株數並一株ノ金高

内務省

内務省

第五　各社員ノ責任ハ固ヨリ無限トナス若社員退社ノ後一年間ニ會社閉鎖スル時ハ其在社中ニ係リタル會社ノ負債及ビ鎖店ノ費用ハ之ヲ担任セシムル事現在ノ社員ト同様タル可キ旨

但此証書ノ記名人ハ其姓名ノ上ニ所持ノ株數ヲ掲ク可シ

無限不定額會社

第一　第二　第三　前節ト同シ

第四　社員ノ數

第五　前節ト同シ

但此証書ノ記名人ハ其姓名ノ上ニ入金ノ高ヲ掲ク可シ

第七節　右証書ニハ最初免許ヲ受ケタル年月日ヲ記載シ別ニ其免許セシ命令書ノ寫ヲ添フ可シ但請願及ビ免許交付ノ手續ハ本條例第七條ニ掲クル新規創立ノ者ト同様タル可シ

内務省

第八節　在來ノ官許會社ニ於テ此條例発行ノ為メ更ニ其社則ヲ改正セント欲スル者ハ其免許ヲ請願スルニ當リ記録手数料ヲ納ムルニ及バス但其後ノ記録請願ニ付テハ総テ本條例第四十四條ノ定規ニ従フ可シ

第三條　従前十人以上ニテ官許ヲ得ザル所ノ會社ハ本條例ニ従ヒ社則ヲ改正ス可キ事ヲ明カニス

第九節　従前人民相對ニ任ス可キ旨指令セシ所ノ會社或ハ全ク官許ヲ得ザル所ノ會社ニテ現在ノ社員十人以上ノ分ハ皆本條例第二第三第四第七條ノ旨趣ニ遵ヒ内務卿ノ免許ヲ請フ可シ若本條例発行後一箇年間ニ之ヲ請願セザル時ハ其営業ヲ差止ム可シ

第四條　在來ノ會社ニ於テ保証有限タラン事ヲ請願スルノ手續ヲ明カニス

第十節　在來ノ會社ハ官許ノ有無ニ拘ハラズ此條例ヲ遵奉シテ保証有限ノ定規ニ従ハント事ヲ請願シタル時ハ地方官ヨリ更ニ其會社ニ命シテ請願ノ次第ヲ各債主ニ報告シ若異

内務省

論アル者ハ或ル一定ノ期日（報告書ノ日附ヨリ三箇月以外ナルベシ）迄ニ當會社ニ申出ツ可キ旨ヲ通達セシム可シ

第十一節　右期日ヲ過テ債主異論ノ者無キカ或ハ異論アルトモ其債主ヲ満足セシムルノ所置ヲ為シ決シテ異論者無キ旨ヲ會社ニ於テ保証シタル上地方官ハ其旨趣ヲ内務卿ニ上申ス可シ

第十二節　前節ノ會社保証有限ノ免許ヲ受ケシ後其免許以前ニ係ル債主ヨリ異論起リ會社ニ於テ其債主ヲ満足セシムル事能ハザル時ハ惣社員ヲシテ其引負フタル金高ヲ更ニ會社ニ入金セシメ以テ之ヲ辨償セシム可シ

但此入金高ハ創立又ハ改正証書ニ約定シタル保証金ニ関係スル事ナカル可シ

第十三節　前節ノ會社若其負債高ヲ詐リ或ハ債主ノ姓名ヲ隠シ其他奸曲ノ所行アル時ハ法律ニ照シ相當ノ罰ニ處ス可シ

右之通遵守可致候事

明治　年　月　日　太政大臣

内務省

會社成規

會社成規

目次

イ 創立証書々例

有限定額會社ノ創立証書

有限不定額會社ノ創立証書

無限定額會社ノ創立証書

無限不定額會社ノ創立証書

ロ 會社定款書例

八 株券並ニ月賦入金証券書式

株券

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

月賦入金証券

二 資本計算書々式

ホ 社負表々式

ヘ 發言ニ就キ代人委任狀書式

ト 株式賣買授受證書々式

株式賣買證書

株式授受證書

チ 出納損益計算比較略表々式

リ 保險其外受托ノ會社資産計算表々式

ヌ 改正證書々例

有限定額會社ノ改正證書

有限不定額會社ノ改正證書

無限定額會社ノ改正證書

無限不定額會社ノ改正證書

會社成規

【イ】創立証書書例

條例第三條

有限定額會社ノ創立証書

証

第一　當社ノ名號ハ有限某會社ト稱スベシ

第二　當社ノ本店ハ何府縣何區何國何郡何所何番地ニ取立ツ可シ

第三　當社ハ何々營業ノ大綱ヲ掲クベシノ目的ヲ以テ創立スルモノナリ

第四　當社ノ資本ハ何圓ト定メ之ヲ幾株ニ分割シ一株ノ高ヲ何圓ト爲スベシ

第五　當社ノ社員ハ一株ニ付別ニ金何圓ノ責任ヲ担保スベキ約定タリ故ニ當社閉鎖ノ事起ル𪜈ハ當社ニ屬スル負債ノ高并ニ鎖店ノ費用ヲ辨償セシガ爲メニ當社現存資産ノ外右保証ノ金高ヲ超エザル迄ハ入金セザル可カラズ若社員退社スル𪜊其退社ノ後一年間ニ當社閉鎖スル𪜈ハ其在社中ニ係リタル當社ノ負債及ビ鎖店ノ費用ハ之ヲ担任セシムルヿ現在ノ社員ト同様タル可シ

今般私共一同商議ノ上明治　年　月　日御制定相成候會社條例ノ趣意ニ基キ前條ノ約束ヲ以テ結社営業致シ度尤右約束ハ社員一同ヲシテ必ス遵守セシム可ク候且左ノ姓名ノ上ニ掲クル株數ハ銘々所持ス可キ筈決定致シ候儀相違無之候仍而開業ノ義御免許被下度此段奉請願候也

年号月日

何府縣何區何國何郡何所何番地

華士族
平民

姓名 印

但五人以上連名

幾株

何府縣知事令何某殿

有限不定額會社ノ創立証書

証

第一 當社ノ名號ハ有限某會社ト稱スヘシ

第二 當社ノ本店ハ何府縣何區何國何郡何所何番地ニ取建ツベシ

第三 當社ハ何々（營業ノ大綱ヲ掲クベシ）ノ目的ヲ以テ創立スルモノナリ

第四 當社ノ社員ハ幾人ト定ムベシ

第五 當社ノ社員ハ入金高何割（五割即十分ノ五以上）ノ責任ヲ担保スベキ約定タリ故ニ當社閉鎖ノ事起ルトキハ當社ニ屬ス

ル負債ノ高並ニ鎖店ノ費用ヲ辨償セシカ為ニ當社現存資産ノ外右割合ノ金高ヲ超エザル迄ハ入金セザル可カラズ若社員退社スルトモ其退社ノ後一年間ニ當社閉鎖スル時ハ其在社中ニ係リタル當社ノ負債及ビ鎖店ノ費用ハ之ヲ担任セシムルコト現在ノ社員ト同様タルベシ

今般私共一同商議ノ上明治　年　月　日御制定相成候會社條例ノ趣意ニ基キ前條ノ約束ヲ以テ結社營業致シ度尤右約束ハ社員一同ヲシテ必ス遵守セシム可ク候且左ノ姓名ノ上ニ掲クル金高ヲ銘々入金ス可キ筈決定致候儀相違無之候仍テ開業ノ儀御免許被下度此段奉請願候也

年号月日

何府縣何區何國何郡何所何番地

金何圓　華士族平民　姓　名　印

但五人以上連名

何府縣知事令何某殿

無限定額會社ノ創立証書

証

第一　當社ノ名號ハ某會社ト稱スベシ

第二　當社ノ本店ハ何府縣何區何國何郡何所何番地ニ取立ツ可シ

第三　當社ハ何々營業ノ大綱ヲ掲クベシノ目的ヲ以テ創立スルモノナリ

第四　當社ノ資本ハ何圓ト定メ之ヲ幾株ニ分割シ一株ノ高ヲ何圓ト為スベシ

第五　當社ノ社員ハ無限ノ責任ヲ担保ス可シ但社員退社スルモ其退社ノ後一年間ニ当社閉鎖スル時ハ其在社中ニ係リタル当社ノ負債及ビ鎖店ノ費用ハ之ヲ担任セシムルヿ現在ノ社員ト同様タル可シ

今般私共一同商議ノ上明治　年　月　日御制定相成候會社條例ノ趣意ニ基キ

前條ノ約束ヲ以テ結社營業致シ度尤右約束ハ社員一同ニテ必ス遵守セシム可ク候且左ノ姓名ノ上ニ掲クル株數ハ銘々所持ス可キ旨決定致シ候儀相違無之候仍而開業ノ義御免許被下度此段奉請願候也

年号月日

何府縣何區何國何郡何所何番地

華士族平民

姓名 印

但五人以上連名

幾株

何府縣知事令何某殿

無限不定額會社ノ創立証書

証

第一 當社ノ名號ハ某會社ト稱スヘシ

第二 當社ノ本店ハ何縣何區何國何郡何所何番地ニ取建ツベシ

第三 當社ハ何々。營業ノ大綱ノ目的ヲ掲クヘシ

以テ創立スルモノナリ

第四　當社ノ社員ハ幾人ト定ムヘシ

第五　當社ノ社員ハ無限ノ責任ヲ担保ス可シ但社員退社スル氏共退社ノ後一年間ニ当社閉鎖スル氏ハ共在社中ニ係リタル当社ノ負債及ヒ鎖店ノ費用ハ之ヲ担任セシムル丁現在ノ社員ト同様タルベシ

今般私共一同商議ノ上明治　年　月　日御制定相成候會社條例ノ趣意ニ基キ前條ノ約束ヲ以テ結社営業致シ度尤右約束ハ社員一同ヲシテ必ス遵守セシム可ク候且左ノ姓名ノ上ニ掲クル金高ヲ銘々入金ス可キ筈決定致候儀相違無之候仍テ開業ノ儀御免許被下度此段奉請願候也

年号月日

何府縣何區何國何郡何町何番地

華士族平民　姓名　印

金何圓

但五人以上連名

何府縣知事・令 何某殿

ロ

會社定款書例

條例第廿條

定款

何府縣何區何國何郡何所ニ於テ何々ノ業ヲ営マンカ為ノ明治　年　月　日日夲政府ニテ制定シタル會社條例ヲ遵奉シテ創立セル（有限）集會社（有限會社ナレハ社名ノ上ニ有限ノ二字ヲ加フ可シ以下之ニ準ス）ニテ社員一同互ニ約定スル規程ノ條々左ノ如シ

第一條　社員ハ必創立證書及ヒ

定款ニ調印スル可キ處

當社ノ社員録ニ記名調印スル人々ハ創立証書及ヒ此定款ニモ之ヲ承諾セシ証拠トシテ必ス記名調印ス可シ

第二條　職業取扱方ノ處

（此條商業會社ナレハ商品ノ制限分店設置ノ場所及ヒ売買ノ方法規則等ヲ掲ケ工業會社ナレハ機關ノ性質職工ノ大数ヒ内国人外国人及男女ノ區別製造品売捌ノ方法規則等ヲ掲ケ其他ノ會社モ之ニ準シ其營業上ノ方法規則等ヲ掲ク可シ）

第三條　職業取扱方時間ノ處

当社ノ業務取扱時間ハ毎日午前何時ヨリ午後何時迄ト定ム可シ

休業ハ例月何日及ヒ定式ノ祝日祭日ニ限ル可シ

第四條　頭取撰挙並免ノ事

当社ニ於テ頭取ヲ撰挙セサル以前ハ発起人ヲ以テ頭取ト視做ス可シ

當社ノ頭取副頭取ハ幾株以上ヲ所持シタル当社ノ社員中ヨリ撰挙シ其人員ハ幾名ト定ム可シ但其撰挙ノ初集會ハ社

員一同ノ都合ニ任セ以後ハ毎年定式集
會ニ於テ之ヲナスヘシ
頭取ハ三ヶ年間奉職セシメ之ヲ一期ト
為スヘシ但衆望ニ由リテハ三期迄奉職
セシムルヲ得ヘシ
頭取副頭取ハ毎年定式集會ニ於テ其三
分一若三ノ数ナラサレハ之ニ近キ人員
ヲ抽クヘシ又二ノ数ナレハ之ヲ二
分スルモ可ナリノ人員ヲ退職セシムル可シ故ニ初集
會ノ後第一年第二年ハ社員ノ投票ニテ
之ヲ定メ其次年ヨリハ先任ノ者ヨリ順
次退職セシムヘシ

頭取不時ノ缺員アル時ハ他ノ頭取ニテ
代人ヲ撰挙シ其缺ヲ補フコヲ得ヘシ此
代人ハ其先役ノ奉職期限ヨリ長ク在職
セシム可カラス
社員ノ集議ニ依リテハ不時ニ頭取ヲ免
黜シ其補員ヲ命シテ之ヲ交代セシムル可
シ

第五條　頭取権利ノ事

頭取ハ支配人及ヒ其他ノ役人ヲ撰任シ
其給料並ニ年期等ヲ取極メ其能否勤惰
ヲ察シ或ハ之ニ勤続キヲ命シ或ハ之ヲ
放免スルノ権有ル可シ又頭取ハ支配人

以下ノ職務ヲ分課シ其身元引受人ヲ納シ保証金ヲ取置キ或ハ過怠金ヲ預受スルノ権アルヘシ

又頭取ハ社員決議ノ旨趣ニ従ヒ株金納方ノ手続ヲ取極メ之ヲ社員ニ通達シ或ハ之ヲ督促シ或ハ條例第六十八節ヲ照シテ之ヲ没収スルノ権アルヘシ

頭取ハ會社條例及ヒ此定款並ニ社員決議ノ旨趣ニ基キ総テ其適任ノ職務ヲ執行フノ権アル可シ又不正犯則ノ所行ハ自ラ之ヲ為サヽルノミナラス又他人ヲ監督スルノ責ニ任ス可シ

（此所ニ會社職業上ニ関係セル頭取ノ権限ヲ掲ク可シ）

第六條　會社役人ノ事

当社ノ役人左ノ如シ

頭取　幾人
副頭取　幾人
支配人　幾人
勘定方　幾人
簿冊方　幾人
書記方　幾人

外
検査役　幾人

第七條　社員集議ノ事

社員定式ノ集會ハ毎年何月数日テモ数度ニ其
月日ヲ定メテ之ヲ執行スヘシ其他総株
此ニ掲リ可シ
数廿分一以上ニ當ル社員ヨリ請求スレハ頭
取ノ協議ニ依リテハ臨時ノ集會ヲ開ク
可シ右臨時ノ集會ヲ開クニ當リテハ其
場所期日並ニ時限及ヒ議事ノ大意ヲ記
シテ廿日以前ニ之ヲ総社員ニ報知ス
可シ

総株数廿分一以上ノ社員ニテ臨時集會
ヲ開カント欲スル時ハ頭取ニ其議事ノ
大意ヲ陳ヘ招集ノ取扱ヲ請求ス可シ頭
取其請求ヲ受ケタル時ハ直ニ招集ノ手続ヲ為サヽルヲ得ス
若頭取半ヶ月間其手続ヲ怠ル時ハ請求人自カラ之ヲ招集
スルヲ得可シ
定式臨時ニ拘ハラス集會ノ議長ハ頭取
或ハ社員中ヨリ臨時之ヲ撰任ス可シ
開議ノ定員ハ幾人ト取極ムヘシ但集會
ニ當リ総社員ノ出頭ル定員ニ充タサル
時ハ其會議ヲ延引シ便宜他日ヲ期ス可
シ

（此定員ヲ取極ムルニハ譬ハ總社員十
名ナレハ其定員ヲ五名ト為シ總員十
名以上五十名迄ハ五名毎ニ一名宛ヲ
増シ總員五十名以上ハ十名毎ニ一名
宛ヲ増加スル等ノ方法ニ倣フ可シ）
（右定員ヲ立ハシテ總株數又ハ總社員
ノ半數或ハ三分一四分一等ノ割合ヲ
以テ制限ヲ立ツルモ又一法トス）
集議ニ臨ミ社員五名以上ニテ投票ヲ乞
フニ非サレハ別ニ發言可否ノ多少ヲ算
スルニ及ハス議長其議ヲ斷決シテ之ヲ
會社ノ議定錄ニ記入シ以テ他日其事ノ
證據ト為ス可シ
若社員九名以上ニテ投票ヲ乞フ時ハ議
長ノ指揮ニ從テ投票法ヲ行フベシ但此
投票ノ多數ヲ以テ集議ノ決定ト視做ス
可シ
集議ニ當リ可否ノ發言相半ハスル時ハ
議長之ヲ斷決スルノ權アル可シ

第八條　社員發言ノ事

社員ハ集議ニ臨ミ一株ニ付毎事一說ヲ

発スルノ権アルモノトス故ニ二人以上ニテ一株ヲ所持スル者ハ申合ノ上其内ノ一人発言スヘシ

社員ハ各其所持スル株数十箇迄ハ五株ニ付一説ツヽヲ発スヘシ十箇以上百箇迄ハ五株毎ニ一説宛ヲ増シ百個以上ハ十株毎ニ一説宛ヲ増加スヘシ

（此ハ一個ノ社員十株ヲ所持スレハ其者ノ説ハ他ノ一株宛ヲ所持スル社員十人ノ説ニ敵ス可リ又一箇ニテ二十株ヲ所持スレハ其説十二人ニ敵シ百株ナレハ二十八人百五十株ナレハ三十三人ニ敵スルノ割合ナリ）

社員ハ集議ニ當リ代人ヲ出シテ発言セシムルヲ得可シ但代人タル者ハ當社ノ社員ニ限ル可シ

（此代人ノ委任状ハ〔ヘ〕標ノ書式ニ従フ可シ）

社員ハ當社ノ要スル集金ヲ時々滞リナリ納メタル者ニ非サレバ集議ニ臨ミ参言スルヲ得ヘカラス若社員中白痴狂癲等ハ如此ノ者アレハ必ス代人ヲ以テ発

言セシムヘシ

第九條　二人以上ノ社員ニ報告ノ事

社員二人以上ニテ一株ヲ所持スル者ハ株券ヲ其内ノ一人ニ付與シ諸報告及ヒ配當金モ又其一人ニ交付ス可シ

第十條　株券書改メノ事

當社ノ株券破損或ハ紛失セシ時ハ其社員ノ請求ニ應シ之ヲ書換ヘ新券ヲ付與ス可シ但破損ナレハ其旧券ト引換ヘ若紛失セシナレハ其次第ヲ明記シ且相違

ナキ旨保証人ノ連印セル証書ヲ差出サシム可シ

第十一條　集金ノ事

當社ニ於テ社員ノ集金ヲ要スル時ハ其度毎ニ必ス頭取ノ名ヲ以テ少ナクトモ十五日以前ニ其旨ヲ通達ス可シ

社員若右集金ヲ納ムルニ付相當ノ定期ヲ乞ヒ出ツル時ハ其期日ヨリ延期ノ時間ハ相当ノ利子ヲ拂ハシムヘシ

社員其時納ム可キ集金高ノ外其株金ノ一部或ハ全部ヲ先納セント乞ヒ會社之

ヲ允ス時ハ右先納ノ高ニ相當ノ利子ヲ
附スベシ
若社員集金ノ期日ニ至リ其納金ヲ怠ル
時ハ頭取ヨリ社員ニ報告書ヲ達シ其集
金並ニ期限後ノ利子及ヒ其怠慢ヨリ生
スル雜費ノ納方ヲ催促スルヲ當然トス
但此報告書ニハ再ヒ其期日ヲ定メ若此
期ヲ誤ルトキハ其株式ヲ沒收スヘキ旨ヲ
記載ス可シ
前節ノ報告書ヲ達スルモ尚再期ヲ怠リ
納金セサル者ハ頭取ノ決議ヲ以テ其株

式ヲ沒收スルコトヲ得可シ
社員其所持ノ株式ヲ沒收セラルヽ時右
沒收以前ニ納ム可キ集金ハ沒收後ト雖
モ尚其責ヲ免カル可カラサルモノトス

第十二條　資本高増加ノ事

社員ノ集議ニテ適當ト決定セシ時ハ新
株ヲ發行シテ資本高ヲ増加スルコトアル
可シ但此新株ハ之ヲ從前ノ社員ニ配当
スルモ又ハ之ヲ發行シテ新社員ヲ募ル
モ其時ニ臨ミ各社員ノ望ニ任スヘシ
右新株ニ付集金ノ納方及ヒ其他ノ定規

第十一條ト同様タルヘシ

第十三條　株式授受賣買ノ事

當社ノ社員其所持ノ株式ヲ賣渡シ譲渡シ又ハ質入レ又ハ借金ノ抵當ト為サント欲スル時ハ預メ其趣ヲ頭取及ヒ支配人ニ申出其承諾ヲ受ケテ後其事ヲ行フヘシ

社員株式ヲ賣買授受スルニ當リテハ双方連印ノ証書ヲ頭取及ヒ支配人ニ差出スヘシ右証書ヲ差出シタル上ハ頭取支配人ニ於テ社員録ノ姓名ヲ書改ムヘシ

（此株式賣買授受ノ証書ハ[下]標ノ書式ニ従フ可シ）

當社ニ負債アル社員若其株式ヲ賣渡シ或ハ譲渡サントスル時ハ頭取及ヒ支配人之ヲ拒ミ得可シ但其債ヲ買主或主ニテ担當スヘキ確証ヲ差出ス時ハ例外タルヘシ

毎年ノ定式集會前半ヶ月間ハ株式ノ賣買授受ヲ停止シ社員録ノ書改メヲ為サヽルヘシ

社員ノ死去或ハ分散ニ依リ其株式ヲ譲

受ク可キ人ニハ何人ヲ論セス頭取及ヒ支配人ノ要用トスル証拠ヲ差出スニ於テハ之ヲ社員トシテ社員録ヲ書改ムヘシ

第十四條　利益金處分ノ事

當社ノ総勘定ハ毎年一月七月両度ト定ム可シ

當社利益金ノ内十分一ヲ以テ豫備金トナシ積置クヘシ但此豫備金ハ当社非常ノ災害ニテ損失ヲ受クルカ或ハ其他ノ事故ニ依リ社員ノ集議ニ於テ適當ト決スルニ非ザレハ之ヲ使用ス可カラス

右豫備金ハ時宜ニ依リ頭取ノ決議ヲ以テ公債証書又ハ不動産等ニ替ヘオクヿヲ得ヘシ

利益金ノ内豫備金ヲ差引タル残高ハ之レヲ株高ニ配當シテ各社員ニ割渡ス可シ

頭取ハ利益配当ノ事ヲ総社員ニ報告セシヨリ後三年ヲ経テ之ヲ受取ルモノナキ時ハ右益金ヲ没収シテ当社ノ豫備金中ニ算入スルヲ得可シ

利益配當金ニハ当社ヨリ決シテ利子ヲ
拂フコトナカル可シ
當社ニ損失アリテ資本金不足スル片ハ
頭取ヨリ其事情計算ヲ総社負ニ公告シ
其後ニ生スル処ノ利益ハ其資本高ノ不
足ヲ補ヒ満ル迄ノ間配當ヲ差止ム可シ

第十五條　記録及ヒ計算簿ノ度

當社ノ創立証書及ヒ定欵社中申合規則
社負録簿ハ業務取扱ノ時間中何時ニテ
モ社負債主ノ撿閲ニ供ス可シ
当社総勘定ノ時頭取ハ其前六ヶ月間ノ
出納精算帳ヲ製シ之ヲ定式集會ニ於テ
総社負ニ示ス可シ
又頭取ハ同時ニ右計算ノ畧表ヲ作リ其
現在ノ資産ト負債トヲ明記シ其營業ノ
得失ヲ一目ニ領知セシムル様編製スベ
シ但此畧表ハ総社負ニ配達シ又之ヲ世
上ニ公告ス可シ
（此計算畧表ハ図標ノ表式ニ従フ可シ）

第十六條　撿査役ノ撰挙及ヒ其
權利ノ事

當社ノ諸簿冊ハ撿査役之ヲ點撿シ精算

帳簿及ヒ其他諸計算ノ正不正ヲ査明スヘ
シ
検査役ハ毎年定式集會ニ於テ之ヲ社員
中ヨリ撰挙スヘシ但頭取其他在職ノ役
人ハ検査役タル可カラス
検査役ハ退職ノ期ニ至リ再ヒ撰挙セラ
ルヽヲ得ヘシ又不時ニ缺員アル時ハ頭
取ヨリ臨時ニ社員ノ集會ヲ乞ヒ其缺ヲ
補セシム可シ
検査役ハ諸簿冊其他一切ノ書類ヲ自社
ニ照検シ得可キハ勿論時宜ニヨリ更ニ
書記計算方等ヲ雇ヒ其職務ヲ補助セシ
ムルヲ得可シ又計算上ニ付テハ頭取其
他当社ノ役人ヲモ推問スルヲ得可シ
検査役ハ精算帳簿及ヒ畧表等ノ検査畢リ
シ時其計算ニ誤リ無キヲ保證ス可キカ
為メ必ス之ニ調印ス可シ
社員五名以上ニテ地方官員ノ検査ヲ受
クルヲ要用トナス時ハ社員ヨリ直ニ之
ヲ地方官ニ請願スルヲ得ベシ

第十七條　諸報告送達方ノ事

當社ノ報告ハ直ニ之ヲ各社員ニ送達ス

ル片或ハ郵便ニ托スルモ其時々ノ便宜
ニ従フ可シ
二人以上ニテ一株ヲ所持スル者ニ報告
ヲナス片ハ社員録ニ於テ筆頭ノ者ニ宛
テ之ヲ送達ス可シ然ルトキハ之ヲ其組合
ノ株主総体ヘ送達シタルモノト視做ス
可シ
凡テ諸報告ヲ郵便ニ托スル片ハ右郵便
ノ常程ヲ量リ其到着ス可キ時間ニ於テ
承知シタル者ト視做スヘシ若シ其報告
ヲ受取ラサル者アリテ異論ヲ生スル片

当社ニテ報告ヲ為セシ証拠ヲ記スニハ
其表書ノ宛名ニ誤リナカリシカ其差立
方郵便規則ニ違ハサリシカヲ証明スル
ノ外他ノ責ニ當ラサル可シ

第廿八條　犯則者処分ノ事

當社ノ社員及ヒ役人等ハ社中ノ諸規則
ニ悖戻シ又ハ不信ノ所行ヲナス可カラ
ス若之ニ違フ者アル片ハ社員或ハ頭取
ノ衆議ヲ以テ其軽重ニ従ヒ相当ノ過怠
金ヲ付シ又ハ社員録ノ姓名ヲ除キ其株
式ヲ没收シ又ハ其事柄ニ依リテハ公裁ヲ

御リ可シ

第十九條　定款改正ノ事

此定款ノ箇條ハ社員特別ノ議定ニ依リ

ラ何時ニテモ之ヲ改正加除ス可シ

年號月日

社員連名　印

此書例ハ一般ノ會社ニ適用スヘキ普通ノ規則ヲ條列セシモノナレハ會社條例第十三節ノ旨趣ニ從ヒ其創立スヘキ會社ノ業体及ヒ發起人ノ協議ニ依リ取捨増減シテ適宜ニ之ヲ編製ス可シ又不定額ノ會社ニ於テハ此書例中株式株券ノ字ハ入金高入金証券ノ字ニ改メ其他株式ニ係リタル條件ハ之ヲ取捨スヘシ但以下改正証書ノ書例ヲ除リノ外總テ此例ニ倣フ可シ

八

株券并月賦入金證券書式

條例第十八條

株券

表

第何番

（有限）某會社株式所有之証

何府縣何區何國何郡何所住居華士族平民何某

殿儀大日本政府ニ於テ制定シタル會社條例ヲ遵奉シ且當社ノ定款ヲ践ミ何年何月何日當社資本中ヘ貳百圓ヲ加入シ即一株主ト為リタルコト相違無之ニ付右証トシテ當社ノ印章ヲ捺シ此券狀ヲ付

面

與スルモノナリ
此株式ヲ他人ニ賣渡シ譲渡サント欲スル時ハ此券状ヲ當社ニ差出スヘシ當社ニ於テ検査ヲ遂ケ故障ナキ時ハ保証書ヲ差出サシメ此券状裏面ノ枠内ヘ買受譲受主ノ姓名ヲ記入シ頭取支配人記名調印シテ後之ヲ差戻スヘシ

年号月日

(有限)某會社
頭取 何某 印
支配人 何某 印

裏

本書株式譲渡之記

年号月日	買受譲受人姓名	頭取記名調印	支配人記名調印

面

月賦入金証券

第一回月賦入金請取之証

一金百五拾圓

右ハ(有限)某會社一株ノ定額貳百圓ノ内
第一回入金五拾圓宛第壹番ヨリ三番迄
三株分合書面ノ金高正ニ落手致候但株
式本券ハ追テ株金皆納ノ上交附可致候
仍テ後證如件

(有限)某會社
支配人　何某
年号月日
頭取　何某

何某殿

二

資本計算書書式

條例二十條

明治八年一月一日(有限)某會社資本計算報告

總資本百五拾万圓 此株數七千五百箇 但一株金貳百圓	内 七千株　發行濟 五百株　未發行

現在資本金百〇四万九千百五十圓

此訳

一株入金百五拾圓宛七千株分合高百〇五万圓ノ内

校

甲某何々ノ事故ヲ以テ第三回ノ集金未納高五拾圓宛二株分乙某何々ノ事故ヲ以テ同断三株分

合金貳百五拾圓

丙某第三回ノ集金不納ニ付没收シタル株金百五拾圓宛四株分

合金六百圓

残高

右當社資本計算前書ノ通相違無之候也

(有限)某會社

年号月日

頭取　何某　印

檢査役　何某　印

ホ 社員表表式

條例第二十條

（有限）某會社社員表

明治八年一月一日現在社員

入社年月	株數	番號	家業	貫籍	住所	姓名
明治何年何月幾日	何箇	自何番至何番	何農工商	何府縣華士族平民	何地何街	何某
同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同

同
同
同
同
同
同
同

總計何千何百何十株　何百何十人

明治七年退社人員

退社年月	株數	番號	姓名
明治七年何月幾日	何箇	自何番至何番	何某
同	同	同	同
同	同	同	同
同	同	同	同
同	同	同	同
同	同	同	同

總計　何十株　何人

明治七年株式沒収人員

沒収年月	株數	番號	姓名
明治七年何月幾日	若干	自何番至何番	何某
同	同	同	同
同	同	同	同
同	同	同	同
同	同	同	同
同	同	同	同

總計何株　何人

右當社明治何年一月一日取調候現在社
員并退社及ヒ株式沒収人員等前書ノ通
相違無之候也

年号月日

(有限)某會社

頭取　何某印

検査役　何某印

發言ニ付代人委任狀書式

定款第八條

發言ニ付代人委任之証

拙者儀(有限)某會社ノ社員ニテ幾株ヲ所
有致シ居候ニ付何某ヲ以テ代人ト定メ
何年何月幾日ノ集會及ビ其延會ニ於テ
發言為致候仍テ委任ノ証トシテ此ニ記
名調印候也

年号月日

貫籍住所

本人　姓名　印

証人　同　姓名　印

ト

株式賣買授受証書書式　定款第十三條

株式賣買証書

株式賣買ノ証

甲某儀乙某ヨリ金何圓正ニ請取(有限)某會社ノ社員録ニ於テ甲某ノ所有シタル何號ノ株式若干ヲ乙某ニ賣渡ス所賣正也然ル上ハ乙某及ビ其相續人後見人等ハ右株式ヲ甲某所有中同様ノ約束ヲ以テ所有可致段致承諾候依テ其証トシテ両人此ニ記名調印候也

年号月日

賣主　貫籍住所　何某　印

買主　同　何某　印

証人　同　何某　印

(有限)某會社

頭取

何某殿

支配人

何某殿

株式授受証書

株式授受ノ証

(有限)某會社ノ社員録ニ於テ甲某ノ所有シタル何號ノ株式若干ヲ乙某ニ譲渡ス

處實正也然ル上ハ乙某及ビ其相續人後見人等ハ右株式ヲ甲某所有中同様ノ約束ヲ以テ所有可致段致承諾候依テ其証トシテ両人此ニ記名調印候也

年号月日

譲主　貫籍住所　何某　印

受主　同　何某　印

証人　同　何某　印

（有限）某會社

頭取　何某殿

支配人　何某殿

チ

出納損益計算比較略表表式

定款第十五條

明治八年上半季（有限）某會社出納計算比較略表　明治八年六月三十日調

總資本金高五拾万圓
此株數五千箇
但一株金百圓
内
四千七百株　発行濟
三百株　未発行

借方　資産及ヒ權利ニ屬スル分

証券貸金

金六万五千圓
他店ノ手形

金五万八千圓
米國某組合ヨリ請取ル可キ
商品代

貸方　資本及ヒ義務ニ屬スル分

資本

金三拾五万千六百五拾圓
此訳
一株ヘ金七拾五圓宛四千七百株
合金三拾五万貳千五百圓内
甲某何々ノ吏故ヲ以テ第三回
ノ集金未納高貳拾五圓宛

預ケ金　在品

金壹万四千圓
抵當アル貸出シ金

金五万五千圓
某銀行ヘ當座預ケ金

金拾五万八千圓
商品在高

金貳万六千圓
大阪某店ヘ積送商品代

金壹万五千圓
公債証書

金壹万三千圓
地所幾ケ所買入代

金貳万〇八百圓
建家及ビ倉庫共幾ケ所買入代

負債

二十株分乙某何々ノ事故ヲ以テ
同断五株分
合金六百貳拾五圓
丙某第三回ノ集金不納ニ付
没収シタル株金七十五圓宛
三株分
合金貳百貳十五圓

残高

金壹万五千圓
某會社ヘ仕拂フ可キ商品代

金四万圓
抵當品ヲ以テ某銀行ヨリ借入レ金

金貳万三千圓
証券ヲ以テ某會社ヨリ借入レ金

拂出　損失　總計

金貳千六百圓
商用具及ビ伙具買入代

金三万三千百九拾五圓
雑貨在高

金貳万圓
英商何某ヘ約定セシ商品代内渡

金五千貳百五拾圓
雑費及役人給料

金貳千百六拾圓
利足拂高

金四拾八万八千〇〇五圓

準備　利益　總計

金壹万三千圓
前季迄ニ畜積セル準備金

金貳千六百三拾圓
前季ヨリ繰越セル配當残金

金貳万九千五百圓
本店利益

金壹万三千二百二十五圓
支店利益

金四拾八万八千〇〇五圓

明治八年上半季（有限）某會社損益計算比較表

明治八年六月三十日調

借方

金七千四百四拾圓　雜費及役人給料并利足拂高共

金三千五百貳拾四圓　當季嵩積準備金但純益高十分ノ一

金三万千四百九拾圓　惣社負ヘ配當金但一株ニ付金六圓七拾五錢（一ヶ年十分ノ一三四ノ割合）

金貳千八百五拾六圓　後半季ヘ繰越ス可キ配當残金

總計　金四万五千貳百八拾圓

貸方

金四万貳千六百五拾圓　本店支店利益合高

内

金三万五千貳百四拾圓　純益

金七千四百拾圓　損失

金貳千六百三拾圓　前季ヨリ繰越セシ配當残金

總計　金四万五千貳百八拾圓

（有限）某會社

頭取　何某　印

計算方　何某　印

本社ノ諸簿冊諸書類照合撿査致シ候處

前條ノ通り相違無之候也

撿査役　何某　印

（有限）某會社

株主各位

御中

此表式ハ唯表ノ體裁ノミヲ示セシモノナレバ實際會社ノ業体其他ノ模様ニ因リ表中ノ條件ヲ取捨ス可キハ言ヲ竢タザレ𪜈貸借ノ品類ヲ區分シ其損益ヲ比較シ看者ヲシテ會社営業ノ實況ヲ一目ニ了知セシムル様注意ス可キ事肝要タリ

此表式ニ於テ資本負債等ノ種類ヲ貸方ニ付シ貸金損失等ノ種類ヲ借方ニ付スル所以ハ下段ノ解釋ニ由リ其主意ヲ理會ス可シ○例ヘハ資本ハ一箇ノ物タリ負債ハ一件ノ事タリ今之ヲ貸方ノ部内ニ掲クルハ此事此物自ラ主トナリテ若干ノ金高ヲ會社ニ付與シ即會社ニ對シ貸方ト為ル可キ條理アルヲ以テナリ又貸金ハ一箇ノ物タリ損失ハ一件ノ事タリ而シテ之ヲ借方ノ部内ニ掲クルハ此

事此物若干ノ金高ヲ會社ヨリ付與セラレ即會社ニ對シテ借方ト為ル可キ條理アルヲ以テナリ餘ハ此意ニ体シ總テ會社ニ金高ヲ付與ス可キ事物（會社ヨリハ入方ト視做ス可キ種類）ハ貸方ノ部分ニ記載シ會社ヨリ金高ヲ付與セラル可キ事物（會社ヨリハ出方ト視做ス可キ種類）ハ借方ノ部分ニ記載スル事ト考フ可シ

○此觧釋ニ由リ尚會得セザル処アレバ明治六年十二月紙幣寮ニ於テ發行セシ銀行簿記精法ニ照シテ其詳ヲ知ル可シ

（り）

保險其外受托ノ會社資産計算表表式　條例第三十二條

明治八年七月一日　（有限）某會社資産計算報告

總資本金高百万圓　内　千九百株　發行濟
百株　未發行

此株數二千箇

但一株金五百圓

現在資本金七拾五万八千五百圓

此訳

一株ハ金四百圓宛千九百株分合高七拾六万圓ノ内

甲某何々ノ事故ヲ以テ第四回ノ集金

未納高百圓宛五株分乙某何々ノ事故ヲ

以テ同断二株分

合金七百圓

丙某第四回ノ集金不納ニ付没収シタル株

金四百圓宛二株分

合金八百圓

残高

借方

資産

金三拾五万圓　公債証書

金拾九万圓　某銀行ヘ預ケ

金五万七千圓

貸方

責任

金貳拾五万圓　何々特別ノ請負約定

金三拾貳万圓　何々通常ノ請負約定

金拾方〇六千圓

總計

抵當アル貸出　金貳万七千六百圓

他店ノ手形　金九万八千圓

現在高　金七拾貳万貳千六百圓

外

家作什器其他所有ノ物品代　金三万五千九百圓

合　金七拾五万八千五百圓

總計

株式引受高　金五千圓

負債高　金四万千六百圓

有餘　金七拾貳万貳千六百圓

(有限)某會社

頭取

何某　印

計算方　何某　印

本社ノ諸簿冊諸書類照合檢査致シ候處
前條ノ通相違無之候也

檢査役　何某　印

又

改正証書書例　條例附錄第二條

有限定額會社ノ改正証書

証

第一　當社ノ名號ハ有限集會社ト称ス可シ

第二　當社ノ本店ハ何府縣何區何國何郡何所何番地ト定ム可シ

第三　當社ハ何々（営業ノ大綱ヲ掲グベシ）ヲ以テ職業トナス可シ

第四　當社ノ資本ハ何圓ト定メ之ヲ幾株ニ分割シ一株ノ高ヲ何圓ト為ス可シ

第五　當社ノ社員ハ一株ニ付別ニ金何圓ノ責任ヲ担保ス可キ事ヲ此度更ニ約定セリ故ニ當社閉鎖ノ事起ル時ハ當社ニ属スル負債ノ高并ニ鎖店ノ費用ヲ辨償センガタメニ當社現存資産ノ外右保証ノ金高ヲ超エザル迄ハ入金セザル可カラズ若社員退社スルモ其退社ノ後一年間ニ當社閉鎖スルトキハ其在社中ニ係リタル當社ノ負債及ビ鎖店ノ費用ハ之ヲ担任セシムルヿ現在ノ社員ト同様タルベシ

當社ハ何年何月幾日官許ヲ受ケ營業致シ来候処今般社員一同商議ノ上明治　年　月　日御制定相成候會社條例ノ旨趣ニ基キ更ニ前條ノ約束ヲ定メ社中規則ヲ別冊ノ通改正致度尤右約束ハ社員一同必ス遵守可致候且私共従前所持ノ株數ハ左ノ通相違無之候仍テ社則改正ノ義御免許被下度此段奉請願候也

年号月日
何府縣何區何國何郡何所何番地
華士族平民 姓名 印
但五人以上連名
幾株
何府縣知事令 何某殿

有限不定額會社ノ改正證書

証

第一 當社ノ名號ハ有限某會社ト稱ス可シ

第二 當社ノ本店ハ何府縣何區何國何郡何所何番地ト定ム可シ

第三 當社ハ何々ヲ以テ職業トナス可シ（営業ノ大綱ヲ掲グベシ）

第四 當社ノ社員ハ幾人ト定ム可シ

第五 當社ノ社員ハ入金高何宮一割（即十分ノ五）以上ノ責任ヲ担保スベキ事ヲ此度更

ニ約定セリ故ニ當社閉鎖ノ事起ルトキハ當社ニ属スル負債ノ高并ニ鋪店ノ費用ヲ辨償センガタメニ當社現存資産ノ外右割合ノ金高ヲ超エザル迄ハ入金セザル可ラズ若社員退社スルトモ其退社ノ後一年間ニ當社閉鎖スルトキハ其在社中ニ係リタル當社ノ負債及ビ鎖店ノ費用ハ之ヲ担任セシムルコト現在ノ社員ト同様タルベシ

當社ハ何年何月幾日官許ヲ受ケ營業致シ来候処今般社員一同商議ノ上明治

當社ハ何年何月幾日官許ヲ受ケ營業致シ来候処今般社員一同商議ノ上明治年　月　日御制定相成候會社條例ノ旨趣ニ基キ更ニ前條ノ約束ヲ定メ社中規則ヲ別冊ノ通リ改正致度尤右約束ハ社員一同必ス遵守可致候且私共従前入金ノ高左ノ通相違無之候仍テ社則改正ノ義御免許被下度此段奉請願候也

年号月日

何府縣何區何國何郡何所何番地

華士族
平民

金何圓

姓　名　印

但五人以上連名

何府縣知事令何某殿

年　月　日御制定相成候會社條例ノ旨趣ニ基キ更ニ前條ノ約束ヲ定メ社中規則ヲ別冊ノ通リ改正致度尤右約束ハ社員一同必ス遵守可致候且私共從前入金ノ高左ノ通相違無之候仍テ社則改正ノ義御免許被下度此段奉請願候也

年号月日

何府縣何區何國何郡何所何番地

華士族平民　姓　名　印

但五人以上連名

金何圓

何縣府知事令何某殿

無限定額會社ノ改正証書

証

第一　當社ノ名號ハ某會社ト稱ス可シ

第二　當社ノ本店ハ何縣府何區何國何郡何所何番地ト定ム可シ

第三　當社ハ何々（營業ノ大綱ヲ揭グベシ）ヲ以テ職業トナス可シ

第四　當社ノ資本ハ何圓ト定メ之ヲ幾株ニ分割シ一株ノ高ヲ何圓ト為ス可シ

第五　當社ノ社員ハ無限ノ責任ヲ担保ス可シ但社員退社スル𪜈其退社ノ後一年間ニ當社閉鎖スル𬼀ハ其在社中ニ係リタル當社ノ負債及ビ鎖店ノ費用ハ之ヲ担任セシムルヿ現在ノ社員ト同様タル可シ

當社ハ何年何月幾日官許ヲ受ケ営業致シ來候処今般社員一同商議ノ上明治　年　月　日御制定相成候會社條例ノ旨趣ニ基キ更ニ前條ノ約束ヲ定メ社中規則ヲ別冊ノ通改正致度尤右約束ハ社員一同必ス遵守可致候且私共從前所持ノ株數ハ左ノ通相違無之候仍テ社則改正ノ義御免許被下度此段奉請願候也

年号月日

何府縣何區何國何郡何所何番地

華士族平民

幾株

姓　名　印

但五人以上連名

何府縣知事令　何某殿

無限不定額會社ノ改正証書

証

第一　當社ノ名號ハ某會社ト稱ス可シ

第二　當社ノ本店ハ何縣（府）何區何國何郡何所何番地ト定ム可シ

第三　當社ハ何々（ヲ揭グベシ）營業ノ大綱ヲ以テ職業トナス可シ

第四　當社ノ社員ハ幾人ト定ム可シ

第五　當社ノ社員ハ無限ノ責任ヲ担保ス可シ但社員退社スルドモ其退社ノ後一年間ニ當社閉鎖スルトキハ其在社中ニ係リタル當社ノ負債及ビ鎖店ノ費用ハ之ヲ担任セシムルコト現在ノ社員ト同様タルベシ